aaca

NACA

(社)日本建築美術工芸協会　2009.4. 別冊

(社)日本建築美術工芸協会
No.55別冊　2009.4.

CONTENTS

aaca 20周年記念事業

●設立記念会

記念講演会「東京スカイツリーの計画とデザイン」…… 2

開催日：2008年12月3日（水）

●記念シンポジウム

「環境に生きる建築・美術・工芸」…… 10

開催日：2009年2月4日（水）

設立記念会
記念講演会「東京スカイツリーの計画とデザイン」

開催日：2008年12月3日（水）
会　場：建築会館ホール
主　催：(社) 日本建築美術工芸協会

特別講演会講師
- 中村　光男氏　(株)日建設計代表取締役会長
- 宮杉　欣也氏　東武タワースカイツリー(株)代表取締役社長
- 澄川　喜一氏　彫刻家

コーディネーター
- 芦原　太郎氏　建築家 芦原太郎建築事務所代表

芦　原　僕は建築家ですが、aacaの理事でもありまして、今日は司会役ということでいろんなお役目をやらせていただいています。

今日は見ていただくと、そこにドーンとすごい模型がございますが、そういうタワーが2011年に東京にできることについて、ご関係の皆様からお話をお聞きしながら、いったいどのようになるのか、明るい未来は来るのか、皆さんとお話しできればと思っております。まずは中村会長のほうから、どんなタワーがいま計画中なのかということをご説明いただいて、その後でお話を進めたいと思います。よろしくお願いいたします。

中　村　それでは私のほうから最初に、このタワーの計画概要についてスライドを使って簡単にお話しさせていただきます。

このスカイツリーはすでに着工しておりまして、工事の完成は2011年のちょうど今頃、あと丸3年になります。これは世界のほかのタワーとの比較です。今回のスカイツリーは高さが610メートル、単独のタワーとしては竣工時点では世界一の高さになる予定です。右側のほうはすでにできているものばかりですが、カナダのトロントのCNタワー、上海のタワー、ラスベガス、それから今の東京タワー、パリのエッフェル塔。現在では確かトロントのCNタワーが500メートルが一番高いと思いますが、これを抜く高さになる予定です。東京タワー、エッフェル塔は鉄骨造ですが、CNタワー、上海、ラスベガスはコンクリート。それからいま工事中の広州のタワーがオーブ・アラップの設計でまだ工事中ですが、これもできても500メートル台だと聞いておりますので、スカイツリーが世界一の高さです。

建物ではドバイのブルジュ・ドバイがいま工事中で、これが上の鉄塔まで入れて800メートル。だいたい600メートルを超えたぐらいまで工事が進んでいますので、高さという意味ではドバイが一番高いのですが、単独のタワーとしてはスカイツリーが世界で一番ということになります。

今の東京タワーです。これが神戸のタワー。これは私どもの宣伝で恐縮ですが、日建設計で設計したタワーをご紹介します。これは瀬戸のタワー。これもデジタル対応のためにできたタワーです。右側が福岡タワー。あと千葉のポートタワーとか、秋田のタワーとか、中国の大連のタワーというのが、私どもが今までタワーを設計した実例です。

まずスカイツリーですが、場所は、東武鉄道さんの業平橋の駅の隣接地です。元の東武さんの操車場の跡になりましょうか。ここが東武鉄道さんの業平橋の駅。それから都営地下鉄線の浅草橋。それからこれは東京メトロの半蔵門線ですかね。押上の駅。地下鉄が2本と鉄道が1つ、合計3つの公共機関がこの敷地に隣接して駅を持っています。

左側のほうは江戸の終わり頃の絵図です。隅田川のいわゆる深川、向島と言われる、ちょうど市街地の外れの部分が今回の敷地になります。広重の絵にも出てくるような場所です。今回のデジタル対応のスカイツリーのタワーができるまでに、東京周辺に、さいたま市、台東区、豊島区などいろいろと立候補地がありましたが、最終的に墨田区の業平橋のところに場所が決まったという経緯です。

私どもは正式決定するあたりから検討を始めておりま

して、計画のかなり最初の頃から澄川先生にもお入りいただいて、東京の新しい景観に対して非常に大きな影響力のあるものですから、景観的な意味において先生の目でできるだけ美しい形を追求していただき、特にモニュメントとしての造形的なもので監修をいただきました。実際私どもの中で、全部で50案ぐらいですか、いろいろな可能性をスタディして、その中で何本かに絞った上で先生との間で打ち合わせを重ねて現在の形になってきたという経緯です。

今回のタワーの特徴をまとめてみますと、最初から高さ610メートルということが分かっておりましたので、一つの単純な平面形と言いましょうか、円なら円、四角なら四角で、足元から610メートルまでずっと同じ形で建てるのではなく、二つの形がお互いに相関するように610メートルの中に変化をつくれないかというところがそもそものスタートです。

そういう意味で、見る方向によって少しずつ形が変わる。それから足元と上のほうでまた形が変わるというような変化するタワーを志したつもりです。結果的には、澄川先生にご参加いただいて検討していく中で、日本的な美の感性を持ったタワーにできないかということで、「反り」と「むくり」というような造形的な要素を取り込んできたということ。もう一つは、足元をできるだけ開放的にということです。結果的には大きく3本の足で持つ形ということで3方向に開かれたゲートを持つデザインになっています。

一番下の平面形が三角で、徐々にその三角から円形に、丸に乗り移り、最終的にアンテナが付く部分は円形です。機能的に、360度に向かって電波を出すということで円形ということは決まっているわけですが、じゃあ足元をどういう形にするかということですが、検討の中で最終的に三角形になりました。ですから三角形と円との二つの形の立体が途中で移り変わっていくという形になっています。

左側に日本的な形ということで日本刀の反り。それから3つの足というのは、殷周銅器がどういう訳か必ず3本の足なんですね。それから一番下にあるのが墨田区のマークです。墨田区さんは区の形も三角形ですがマークも三角形です。これはちょっとこじつけに近いのですけれども。

左側が全体の姿図です。エレベーションでご覧いただくと一番下にある展望台のところの高さが350メートルございます。ここにいわゆるレストラン等、飲食の部分が入ります。もう一段上、高さ450メートルのところに展望台があります。

構造方式ですが、これは澄川先生からもお話しいただきますが、結果的に五重塔の構造とかなり近い形になっています。五重塔はご存じのように真ん中に心柱という一本の大きな通した柱があり、その周囲に木造の木組みで組み上げた、心柱に比べればいわゆる剛接合ではなくて、少しピン接合の柔らかい木組みが周りを取り囲んで、全体として耐震性に優れた構造建築をつくっているわけです。今回のこのスカイツリーの中心の部分はエレベーター、階段を入れる、いわゆる芯の部分ですね、コアの部分と周囲の鉄骨造を取り巻いた形ということで、五重塔の構造のシステムとほとんど同じ考え方でできています。

610メートルと言いますと、横の力というのは、ほとんど風の力が強いわけですが、風に対しての制震装置という意味では、やはり心柱の部分と周囲の鉄骨造の円形の違いをそれぞれ、いわゆる制震ダンパーでつないで、つなぐことでそれぞれの揺れをお互いに消し合うということで中間に制震ダンパーを入れています。一番頂部にはやはり重心を変える制震装置を入れて、全体として制震性の高いタワーになっているのではないかと思います。

材料の強度ですが、私どもが東京タワーを設計したときから、技術的な進歩という意味では材料のいわゆる倍強度の高張力鋼が今回使われて、ちょうど鉄の強さとすれば倍の強さの高張力鋼を使っています。基礎ですが、あのへんの向島あたりは地盤がほかの都内に比べて特に悪いというわけではないのですが、30メートルぐらいのところに支持層がありますが、さらに20メートルその支持層の中に杭を打ち込んで、全体では50メートルの深さでほとんど引き抜きに対する杭をつくっています。

これが全体のモンタージュの写真です。動画が3分ほどありますので、見ていただくとお分かりいただけると思います。

動画開始

2011年、新たな都市文化の象徴が生まれます。日出る国日本の首都、東京の東、隅田川のほとりに世界で最も高い塔が築かれます。新タワー。このタワーがそびえるのは東京の新しい文化拠点、業平橋、押上地区、浅草、向島などの伝統ある街に囲まれ、東武線、地下鉄、水上バスなどが行き交う交通の要衝です。最新の技術を駆使して建設される新タワー。地上600メートルを超える世界一の高さを誇る展望タワーです。それでは第一展望台へとご案内しましょう。地上350メートル。2層の吹き抜けとガラス張りによる開放感が広がります。さらに上へ。第2展望台へと向かいます。ぐるりと取り囲んでいるのは天空回廊。東京湾や関東平野を一望にできます。地上450メートル。これまで見たことのない眺望を楽しむ、まさに空中散歩です。

東京の空に新たな景観を描く新タワー。未来へと希望をつなぐ斬新なデザインです。タワーへのゲートは3ヵ所。中央のエレベーターを取り囲む3本の足がタワーをしっかりと支えます。タワーの足元の断面は三角形。それが頂上に向かうにつれ円へと移り変わり、タワーを形づくるラインが連続的に変化します。そのデザインには日本の伝統美が盛り込まれています。しなやかな切れ味

の日本刀が持つ「反り」。そして中央がゆるやかに膨らんだ「むくり」。寺院や神社の柱に見られます。耐震構造にも日本古来の知恵が生かされています。五重塔は中心を貫く心柱と各層が異なる動きをすることで揺れを抑えると考えられています。この仕組みを現代的に解釈し最先端の耐震構造を実現しました。

動画終了

中　村　以上です。

芦　原　すごいですね、驚いちゃいました。最近は元気のいい話があまり日本はないですよね。世界的にないですけれども。世界一のなんとかって言うと、だいたいは中国だったり、ドバイだったりと思っていたら、やっとこの日本にも世界一ができるという話で、ちょっと元気になりそうです。とにかく世界一、610メートル、東京の新しい景観ができちゃうというお話、すごいですよね。澄川先生は彫刻はお手のもので大変な大家でいらっしゃいますが、こんな大きな彫刻は初めてですよね。彫刻と言うのか、モニュメントと言うのか。そのへん先生はどんなことをお考えになって日建設計の方々とデザインを詰めていかれたか、お話しいただけますか。

澄　川　最初にお話をいただいて、私もびっくりしたのですが、設計の方がみんな生き生きしておられましてね。私がお伺いしたときはもう50ぐらいいろんな模型をつくっておられました。

私は最初に、日本でこういうものをつくるのだから、やはりエッフェルさんのまねをしても、ドバイのまねをしてもしょうがないし、日本というのをまず考えましょうということで始めました。

例えば聖徳太子のゆかりの法隆寺の五重塔がさっきも出ましたが、狭い敷地に木造で、法隆寺は35メートルちょっとあると思いますが、建っている場所が６メートルぐらいの四角しかありませんよね。木造でそれぐらい狭いところに建って、ボルトも釘も使っていないのが置いてあるというのは不思議な感じがしますので、これが一番いいんじゃないかなということでスタートしました。

いま中村会長がおっしゃいましたが、動きをどういうふうにするかと言うことよりも、まず狭い敷地で高いものをつくろうというのだからシンプル・イズ・ビューティフルが一番いいんじゃないかと。過剰な装飾はないほうがいいし、日本の技術で日本の伝統ある、世界に誇れる五重塔が非常にきれいですから、そういう形態を想像しながら形を求めれば、最も日本的なものとして世界に誇れるのではないかということからスタートしました。会長がおっしゃいましたが、心柱はコンクリですよね。

中　村　そうです。

澄　川　あそこは400ちょっとまで行きますよね。

中　村　ええ。500ですね。

タワーの写真

澄　川　それが五重塔で言えば貫いている心柱。心柱というのはこういう１本があって、４本の四天柱が最初に立ちまして、１層ずつ重ねていくのですが、外から見ると１面に４本柱が見えると思います。それが側柱（がわばしら）と言って一番外の柱ですよね。中に入れませんが、中は４本。四天ですから、持国、増長、広目、多聞という四天王の四天ですが、それがまず囲んで、外を12本の側柱が囲んで、それでその４本と12本はつながりができるのだけれども、問題は、法隆寺の場合はこの心柱に触ってないのです。４層、５層とありますが、５層になってから初めて心柱に周辺から組み込まれていく。

我々の人体と同じなんです。人体は、皆さん火葬にされたときに、今はバラバラになりますが、そうっとされたら206個ぐらい骨があると思います。それはボルトで締めていないし、いろんなものでくっ付けていないものが輪ゴムのように束ねられて立っているわけですよね。そうすると狭い両足で、ジャイアント馬場はちょっと大きいかもしれませんけど、普通は26センチぐらいの２本の足の裏で60キロから70キロぐらいのものが立っている。

下から行きますと、腰から下は割にしっかりしていて、それから背骨に入りますけど、腰を痛めると腰痛と言いますよね。腰椎は５個ですよね。それから背骨と言われるのが、胸骨が12個あると思いますが、これは重ねてあります。ボルトで締めてありません。それから頸椎が７個ぐらいあって重い頭を支えている。そういうのを想像していただくと、非常に柔軟に倒れないで立っていられる。僕は今度できるものは人体のような気がするんです。簡単に言うとそうです。そういうことの上で新しい技術を入れれば、外見はシンプル・イズ・ビューティフルで日本の五重塔もイメージされるのではないか。外国のまねではない、考えも日本、方法も日本、材料も日本。そういうのが一番いいんじゃないかと思っています。

芦　原　レオナルド・ダ・ビンチのように先生はデッサンされると骨とか全部、人体も分かっていらっしゃるんですか。

澄　川　ええ、美人のは分かるんです。(笑)

芦　原　骨組みがあってきちっと立っていると。とにかくすごい大きさ。まだ分からないわけですけど、実際にできたらものすごい大きさですよね。それはやっぱり東京の景観に確かにものすごいインパクトがあると思います。東京タワーもできたときは、なんだあれはみたいな感じであまり評判がよくなかったですね。50年前にできたときは、パリのエッフェル塔より背が高い世界一のという時代が確かにあったんだけど、何かなという感じだった。僕も東京で生まれて東京タワーにずっと上らないで、ついこの前、大人になって外人を連れて行くときに初めて上ったのですが、そんなタワーもずっと都市の中に何十年も存在しているうちに、だんだん存在感を持ってきて、特にライトアップをし始めましたよね。あれは石井幹子さんがやられたんですか。あのライトアップをした頃からやけに評判が上がってきて、最近では都心のマンションで東京タワーが見える部屋は家賃まで高いということです。

昔、僕はシドニーに行って、オペラハウスが見える部屋は高いんだなんていう話を聞いて、窓から見えるものによって部屋の値段が違うなんてすごいな、東京にはそういうものはないなと思っていたのですが、東京タワーがそうなっちゃった。今度、このタワーが見える部屋がすごく価値が出るぐらいのものになりそうですか。

澄　川　早めに買っておいたほうがいいんじゃないですか。(笑)

芦　原　なんなんですかね。タワーって都市の中で見上げるなり、昔の五重塔もあるし、なんか元気になってくるんですかね。

澄　川　五重塔の話ですが、聖徳太子の話をしましたけど、古代はすごい塔が日本にあったようですね。今は木造で20何塔残っていますよね。7世紀にあれだけのものをクレーンも何もないのにつくり上げる。日本人なんでしょうね。それもいくつもつくっています。やはりそれは街興しというか精神的に何か祈りのシンボリックなものだったと思います。五重塔自体が卒塔婆と言って釈迦の仏舎利塔ですし、宗教を超えた人間の祈りみたいなものがあったのだろうと思います。今度これができたら街興し、地域興し、日本興しのようになるんじゃないでしょうか。昔の五重塔は絶対にそうだったと思います。

パワーポイントの写真

芦　原　なるほどね。2011年、新たな街が登場するでしょうか。宮杉社長はこれをご計画されたわけですが、610メートルのタワーの足元にビルのようなものがあったり、低層のものが広がっています。これはある一つの全体の大きな開発計画なのでしょうか。事業としてはどういうふうにお考えになっておつくりになったのですか。

宮　杉　東武タワースカイツリーというのは企業の名前、称号で、東京スカイツリーというのはタワーの名称、営業施設の名称です。

まず最初に、日本建築美術工芸協会の20周年の記念式典に新しいタワーを紹介させていただくことを大変光栄に思います。ありがとうございます。

私ども、このプロジェクトをライジング・イースト・プロジェクトと申しまして、日本の東、東京の東から新しい光が輝いてくるという意味でライジングイースト。

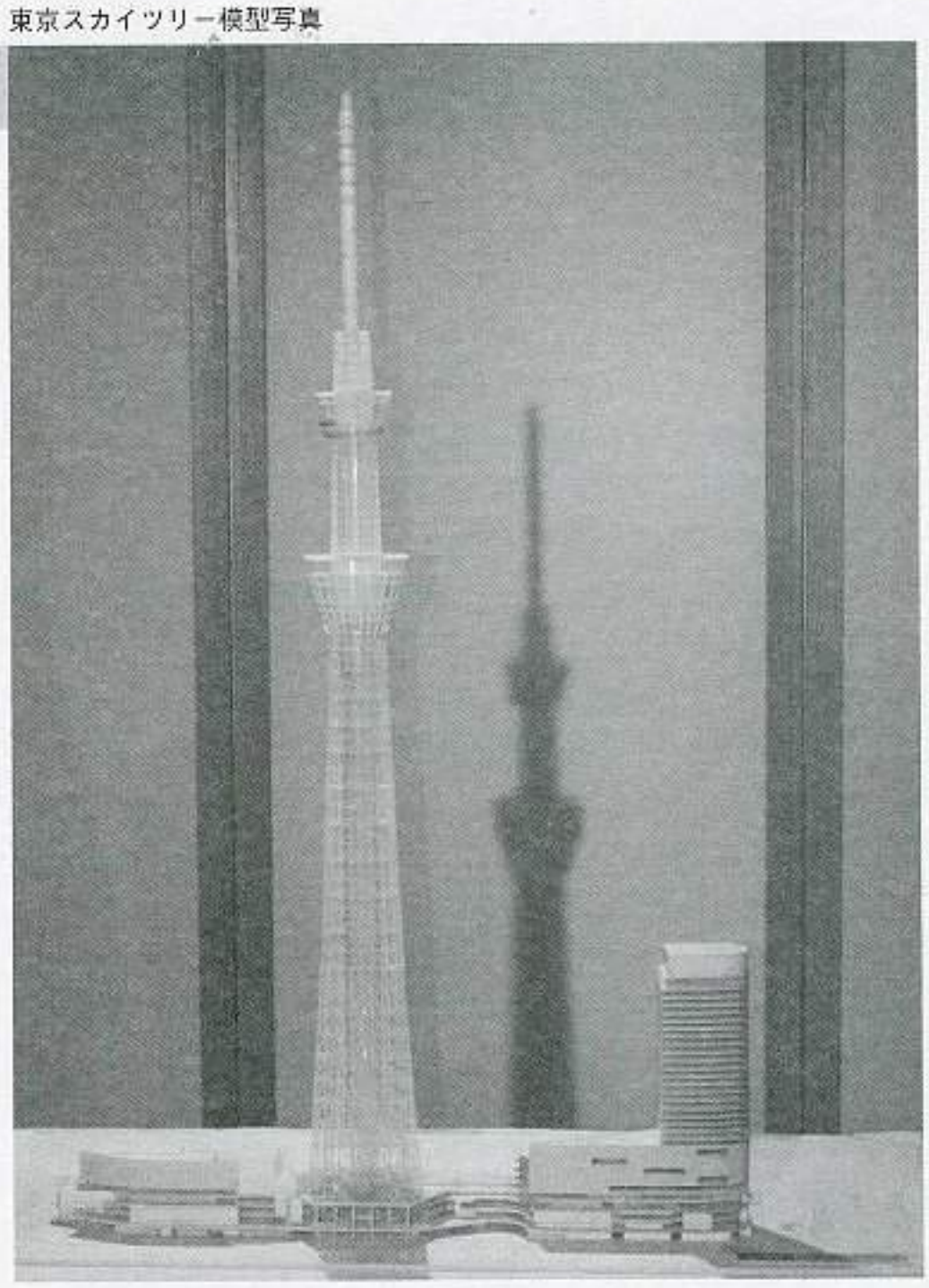
今お話がございましたこの敷地は約3.7ヘクタールございまして、その中にタワーが建つと同時に、足元に街が開けて、タワーが約610メートル。一方のオフィスタワーがだいたい150メートル、32階建を予定しています。総延べ床面積約23万平方メートルです。

今まで東京の西あるいは南のほうに新しい再開発のビルとかプロジェクトがどんどん進行してまいりまして、かつて上野、浅草、向島といったところが賑やかな街でしたが、どうも都市軸が西へ、南へ行っている。これをなんとか東のほう、城東地区にまた戻したい。街としての復権をしたいという思いもございまして、トータルでタワーのお客様、それからそれに合った街づくりのお客様。これをもってこの地域をまた活性化したいという願いを持っていま計画を進めているところです。

芦　原　どちらかと言うと、東京って西方向に地価も高くなったりして、人々やいろんなものが行くけど、今度は東へ東京の元気の素を持っていこうかという大きな計画の下にということですね。このタワーというのは、私も全然知識がないのですが、そちらの会社が所有されるのでしょうか。要するに僕らの意識では電波は公共的なものかなと思っていて、もしそういう公共的なもののタワーができるとすれば、公共的なところがそういうものをやるのかなと思いがちなのですが、これはあくまでも民間がこれをつくるという事業になっているんですか。

宮　杉　5年ほど前にNHKを含めた放送6社、7局が、東京タワーさんの周りに200メートルを超える高層ビルが続々と立ち並ぶようになりまして、将来を考えますと相当な数で電波が正常に受信できなくなる恐れが高くなっているということを心配されまして、どうしても600メートル級のタワーが欲しいと。しかしながら自分たちだけでこれをつくるのはなかなかつらいものがあるので、電

東京スカイツリー模型写真



波塔をつくると同時に、それを併せて観光タワーもやれば事業的にもある程度採算が取れて、いいものができ上がるのではないだろうかといった思いで、どこかやりませんかという話をしたときに、先ほど中村会長からお話がございましたように、首都圏で15の地域が手を上げて、最終的に私どもの押上・業平の地区が選定されたということです。私どもがこれを建設して、所有して、経営をいたします。電波塔については放送事業者さん、あるいはラジオ、無線とか、それをお使いになるところに賃貸をするということで考えています。そのほか私どもは展望台での観光収入を当てにしていて、これを間違いなく50年、100年、安定的に経営していきたいと願っています。

中　村　先ほどもほかのタワーをご紹介しましたけど、基本的にはやはり民間企業さんがタワーを建てて、テナントとしてテレビ局等が電波をそこから発信する。いま日本のタワーの形はすべてそういう形です。今の東京タワーももちろんそうです。

芦　原　電波というのは僕らにとって大事な公共的なものですからね。タワーというものは民間がいま日本ではやっている。ただ、これだけのものが建つということは、ある種、都市景観なり、かなり公共的な要素を持っていますから、そういう意味では建築家、あるいは民間事業者としてそのへんをずっと肩に背負って、文化を背負って、今回のような計画をされているということなんでしょうね。

中　村　それで澄川先生にご参加いただきました。

芦　原　中村会長、いかがですか。人間って、本当はすごいタワーを建てたいという欲求や夢がありますよね。ピラミッドもあるわけですし。各歴史の中にもある。平成のこの時代に文化事業の枠組みの中で、一つの電波塔という形でとにかくこういう高いタワーが建てられるという千載一遇のチャンスみたいなものですよね。平成の時代にこんなものが建ったと。100年後、200年後にどういう形で日本の方々が受け止めていくのか。肩にすごい重荷を背負ったのではないかと思うのですが、そのへんはいかがですか。機能的とか、プログラムとしてはこう来たと、いよいよ日本の文化なり都市景観を背負ってというあたり、どうでしょう。

中　村　そういう気負いはないのですが、ただ東京の街の景観への影響力はすごく大きいと思うんです。東京タワーも最初はあまり評判がよくなかったというお話ですが、あれも私どもの設計なんです。（笑）今は石井幹子さんの照明で人気が出てきて東京の一つのシンボルになっている状態ですが、今回は最初から人気が出るようにしなければいけない。30年ぐらいたってから人気が出たのでは困りますのでね。そういう意味では夜間の照明も非常に重要だと思うのですが、これはできてからのお楽しみにしていかないと、今もう発表しちゃうと……。

芦　原　いろんな仕掛けがあるんですか。

中　村　そうですね。今回もう一つ東京タワーのときと違うのは、610メートルありますけど色彩については今度は自由なんです。なにも赤白にする必要はない。そのへんも含めて全体の色調、それから夜間照明などを含めて新しい東京のモニュメント、シンボルにしたいなと思っています。

芦　原　隅田川で花火なんかを見ますと、いいなと。

中　村　ええ、隅田川の花火が一番いいと思います。

芦　原　花火と隅田川とこのタワーがパックになると、かなりインパクトがあって、「フジヤマとゲイシャ」に次ぐ「タワーと花火」みたいな感じで世界の名物になるんじゃないかという気配を感じます。うちの父がよく言っていたのですが、東京タワーとパリのエッフェル塔を比べっこして、エッフェル塔は足元がスカッと空いているというわけですよね。道路がワッと通っていて、シャンゼリゼがあって、抜けていくとその向こうにデファンスなんていう新しく街ができている。万博のときのあれですから機能はないけれども都市のモニュメントとして都市の中に位置付けられている。

一方、我が国の東京タワーの足元を見ると、足の間に四角い建物が入っていて、中に蝋人形館があるみたいな感じでね。いわゆる都市計画的な位置付けが全然違う。パリのエッフェル塔のほうがそういう意味ではいいんだみたいなことを言っておりましたけれども、今度はたぶん街づくり、地域づくりの中である位置付けはされていると思います。よく分からないのですが、隅田川なり、周りとの環境のすり合わせもいろいろ工夫されているの

でしょうか。

中　村　そうですね。約500メートルぐらいのところに隅田川があります。それから隅田川から、十間堀と言いましたか、堀がずっと東京湾までつながっている、ちょうど敷地の南側に水辺空間ができていますので、そういう意味ではできるだけ水との関わりを足元でつくっていきたいと思っています。ただ、東京の街はパリの街とは根本的に違いますので、ああいう形にはならないのですが、足元には、この企画内容もまだ具体的に発表していませんが、かなり大規模な商業施設が入って、賑わいを足元でつくっていこうということと、それから屋上をできるだけ積極的に使っていこうということで、緑とか水とか、そういうものも足元に取り込んでいこうと考えています。

芦　原　隅田川があるし、江戸なんかですと「水の都、江戸」のような感じで、水辺を回りながら東京へ行ける。隅田川から水辺を伝わってこちらや、あるいはほかにもつながっていくなんていうのもロマンチックでいいなという気がします。

中　村　今でも隅田川の水上バスの乗降口がすぐ近くまで来ていますので、それをできるだけタワーの足元まで持って行ければと思っています。

芦　原　手前まで入ってくるといいですね。宮杉社長、そのへんのいろいろソフト等々もいろいろお考えになっているのですか。

宮　杉　私ども一企業だけではなかなかできない問題もございまして、私どもは台東区、墨田区、両区さんの協力をいただきまして、またその周辺のこともいろいろな相談をしているところです。いずれにしても行政さんが大変力を入れておりまして、今の水辺の空間の整理とか、どういった回遊ルートをつくってお客様に幅広くこの地域を知っていただき、楽しんでいただくか。そのようなものを今やっております。したがって、街全体は簡単に3年ででき上がりますが、本当の意味での、パリのエッフェル塔とか東京タワーとか、地域に根ざして溶け込んだ風景というのは30年、50年掛かってようやくでき上がってくるものかなと思っております。

芦　原　2011年と言うと、もうあと3年ですね。

宮　杉　丸3年ですね。

芦　原　アナログが2011年にはなくなってデジタルに。

宮　杉　7月24日ですね。

芦　原　ここから来るデジタル電波を僕らがいただいてテレビが見られるようになる。

宮　杉　ちょっと誤解されている方が多いのですが、現在のアナログ放送と地上のデジタル放送、両方が東京タワーから発信されていて受信されています。そのうちアナログ波だけが7月24日に停波になりまして、引き続き地上のデジタル波は東京タワーから発信を続けて皆さん方がご家庭でご覧になる。

芦　原　東京タワーのデジタル波が僕らのところに来るんですか。

宮　杉　はい。私どものタワーが2011年の年末にできまして、その後、試験放送やら何やらを経過して、2012年のある時期に電波の発信基地が東京タワーからスカイツリータワーに移るということです。

芦　原　2011年に建っていても、ここからはまだ私どものところ電波は届かないんですね。

宮　杉　はい。2012年の春からです。

芦　原　楽しみですね。澄川先生、どうですか。

澄　川　観光とかシンボリックなものということがお話に出ましたけど、私も関係してみて、まずおもしろいなと思ったのは、心柱の中にずっと階段があるんです。階段がこの先端まで上れるようになっていますから、お元気な方は上っていただいて。(笑) それから350メートルのレストランは、今の東京タワーよりもっと高いところにできます。それから100メートル上がったところが展望台ですよね。

中　村　そうです。450メートル。

澄　川　そこに今ちょうど模型が見えますが、斜めにパイプが回っています。あれがガラスのチューブを巻き付けた形です。直径4メートルぐらいあるんですかね。

中　村　3メートルほどです。

澄　川　3メートルぐらいのパイプを、我々が勝手なアイデアを出したら、できると言うんです。そうするとパイプの中を歩くわけです。水族館に行くと今そういうのがありますよね。どっちが見られているか分からないようなところがあります。そうすると、外から誰が見ているかというと風神・雷神が天気のいい日は出るんじゃないか。楽しみがすごくある形が、ちょっとニュースになる……。今あまり言わないほうがいいですか。

芦　原　まだ仕掛けがいろいろあるんですね。

澄　川　かなり仕掛けがあります。ちょっと高所恐怖症の方もおられると思いますが、それを感じないようなすばらしい塔のようです。なんか私、宣伝部みたい。(笑)

中　村　ありがとうございます。(笑)

芦　原　建築、技術、工芸ですから、風神・雷神なり美術・工芸もいろいろ今後考えられていくんですか。

澄　川　ちょうど北斎さんがいたところですよね。それと江戸の物資の集積場みたいで、川を伝わって発展して、江戸に物資を運んだということで、先ほど水路の話が出ましたけど、水と緑と新しいタワーというようなテーマが出ればすごくいいと思います。

芦　原　そういう文化的なことも体験ができるような場所になってくる。

澄　川　ええ。北斎美術館も計画されているようです。

芦　原　この近辺にですか。
宮　杉　区のほうで、両国の駅の近くですが、このタワーの完成に併せて北斎記念館を。
芦　原　東は江戸文化再興みたいな雰囲気でがんばっていこうというところですかね。会津のほうにさざえ堂ってありますよね。五重塔みたいな格好なんですけど、ぐるぐる回って上って行って、また上からぐるぐる二重らせんで戻ってくる。その間に三十三観音参りをする。要するにタワーをぐるっと上って、ぐるっと下りてくると一通り三十三観音を回れたという御利益があるということなのですが、これも一生に一度上まで行って下りてくれば大変御利益があるとか何かあるんですかね。(笑)
宮　杉　今私ども、ただ高いところへ上って景色を見るということだけではなく、やはり何かを感じていただきたい。一つは時間軸。いま先生からお話がございましたように、過去の江戸文化とか下町文化、こういったものが色濃く残っておりますから、その昔の江戸あるいは現在の東京、そしてさらには未来の東京、日本。それから空間軸で申し上げますと、足元の隅田川地区、下町。それから展望できる東京を中心とした関東平野。

　さらには日本、世界各地。上に上がるにつれて我々はこういった演出を考えて、自然にそういったものを感じながら450メートルの眺望を楽しんでいただきたいなと思います。高いところに上りますと、今まで見えなかったものが何か見えたり、あるいは感じられなかったものが急に感じられるようになったり。そういうものを持って帰っていただければありがたいと考えています。
澄　川　法隆寺の五重塔なんかを見ていただくとバランスがちょっと似ているんです。五重塔は全長の３分の２ぐらいまで５層の屋根があります。あと３分の１が双輪と言って、スッと出ています。このバランスが非常にきれいなんです。ただ五重塔は屋根が軒深く出ていますから、それを取ってもらったバランスがこの塔だと思っていただければ、ちょっと納得がいくのではないかというバランスを持っています。

芦　原　彫刻的にもなかなかいいバランス。日本の和の伝統であると感じられる方がどのぐらいいらっしゃるか分からないですけど、解釈の仕方ですよね。パッと見ると日本の伝統という感じはしないのですが。
中　村　ただ、ほかの500メートルクラスはだいたいコンクリートです。細い線材で組み上げているという形はやはり木造の絵じゃないかと思います。
芦　原　早く見てみたいですね。とにかくすごいスケール感でしょうからね。
パイプですか。
中　村　ええ、パイプです。鋼管ですね。
芦　原　材は鉄のパイプなんですか。丸ですか。
中　村　パイプと言っても下のほうは直径２メートル以上ありますのでね。
芦　原　円形ですか。
中　村　円形です。
芦　原　何色……。
中　村　最終的にはもう少しですね。
芦　原　研究中。
中　村　明るい色にしようということにしております。
芦　原　一色じゃなくて多少……。
中　村　それはあまり複雑なことは。シンプル・イズ・ベストですから。
澄　川　東京タワーが80メートル四方に踏ん張ってますよね。
中　村　これは足元は70メートルなんです。だからちょうど１対９ぐらいでしょうかね。
芦　原　僕も建築ですけど、僕らがそういうビルを設計すると構造の人に怒られちゃったりしてね。そんなひょろ長いのはダメですよと言われるけれども、さっき言った心柱とダンパーでちゃんと保つようにバランスしている。世界にいろんなタワーがありますが、こういう技術はほかにはないのですか。
中　村　プロポーションですか。
芦　原　プロポーションではなくて、心柱に対して制震ダンパーをずっと付けていくようなやり方。
中　村　一番近いのがいま工事中の広州のタワーでしょうか。あれがやはり鉄骨をパイプ層でつくっていますから。アロップの設計ですから少し曲がって、ひねりながらつくっていますのでね。向こうは非常に中国的かもしれないですね。
芦　原　現代の技術という意味ではそれが一番……。
中　村　こういう構造のシステムはたぶん初めてだと思います。
芦　原　例えば1000メートルをつくってくださいと言われると技術的にはできちゃうんですか。
中　村　たぶんできますよね。
芦　原　技術の限界というのはないんですか。
中　村　いまサウジアラビアのジェッダでマイル・タワーというのが計画されています。
芦　原　あれはオフィスビルですよね。
中　村　住居棟ですね。サウジアラビアのは計画です。ドバイのはほとんど出来上がっていますが、あれもほとんど住居です。たぶんオフィスにするとエレベーターが足りないんです。
芦　原　こういう電波塔であればいくらでも。ただそんなに高い必要はないんですか。
中　村　ええ。
芦　原　この高さというのはどういうことなんですか。

中　村　関東平野をカバーする。

芦　原　カバーするには、ある角度でこの高さが必要になるんですか。

中　村　ええ、必要だということです。ですから関東だけが600メートルです。あとは名古屋の瀬戸タワーが250メートルかな。

芦　原　それぞれの地域をカバーするにはその高さで。

中　村　どこまでカバーするかによってですね。

芦　原　そろそろ時間ですが、最後に一言ずつ。

中　村　実は浅草との関係、浅草寺との関係をお話ししていなかったのですが、吾妻橋を渡って、距離で言うとわずか1キロしかないんです。ここと浅草寺、雷門のところとですね。ですから歩いても15分ぐらいです。それと両国の国技館は1.5キロぐらいありますが、隅田川沿いにちょうど両国、浅草、それからこの業平橋というのが新しい東京の名所としてうまく回遊動線をつくっていけば。このへんは宮杉社長がおっしゃったように墨田区とか台東区さんが積極的にかなり熱心にやっておられるので、もう少し広い範囲でこの計画をさらに進めていければと思っています。

芦　原　外国の方が最近大勢東京にいらっしゃいますよね。けっこういろいろ皆さん、勝手に不思議なところを自分なりに探して、東京はおもしろい、おもしろいって言って帰って行く外人の方も多いのですが、日本人として胸を張って日本はこうなんだよとか、東京はこうだぞという場所がなかなかないんですよね。ぜひそこは一つの昔の下町が今やこういう形になって、隅田川もあって、江戸っ子がここにいたんだぞというようないい場所になっていくといいなと思います。宮杉社長、それを事業としてそれをやっていくとなると大変ですね。

宮　杉　いま中村会長が、非常にひいき目で、これが世界一の高さになるとおっしゃいましたが、実はライバルがございまして、広州タワーも公称610メートルを標榜しておりまして、完成が少し私どもよりも早くて、2009年度あるいは2010年の前半ということを言っております。私はちょっと敵状視察をして参ったのですが、同じように外回りが網の目になっていて鉄のパイプでできています。私ども、お客様以外にも地元の方に愛されたい、親しまれたいと思っておりますから、あまり圧迫感があると困るなと思っていましたが、本当に20～30メートルの近くで上を仰ぎ見ましたけれども、非常に素直に受け入れられる。それほど圧迫感がない感じがして非常に安心いたしました。

観光とか電波塔というだけではなくて、私どもはこれをこの地域の安心のシンボルにしたいなと思っております。今でも地震や台風があって街中が非常に荒れたり壊れたりしますが、そういうことがあっても、外を見ると私どもの東京スカイツリーが何事もなかったように悠然と建っている。これで皆さん方は安心をして、さあまたがんばろうと。こういったものを受けるタワーにしたいなと思っております。

五重塔

芦　原　楽しみですよね。確かに法隆寺の宝輪でも、高さを競うのは一番先っぽのところかもしれませんけど、あのへんは先生の彫刻が乗ったりはしないんですか。

澄　川　いえいえ。

芦　原　負けそうになったら先生の彫刻を乗っけて広州に勝つとか。

澄　川　五重塔の相輪というところは九輪という九つの輪があるのですが、一番上に宝珠という丸いのがありますよね。そのへんは飾りなんだけど非常にシンプルでいいデザインです。それにちょっと似ているんですよね。一番先っぽは重しか何か。まだ言っちゃいけないんですかね。人間も頭が重くないと、ここから取っちゃうと倒れちゃうんです。引力をウッと抑える、揺れを止めるというのは頭部の重さだそうです。だから頭の軽い人は倒れちゃうんです。

芦　原　これは東武がつくっていますから。東武タワーですから。(笑)

澄　川　頭部がきちっとできれば大丈夫です。

芦　原　大丈夫ですね、宮杉さん。東武がやられていますから。

澄　川　それと北斎の出身地だし、今でもこの地域は手づくりの職人の人が多いんです。だから僕は地域がそういうものも検証しながら、お台場とか新橋とか、そっちの街づくりではない江戸のにおいのする、浅草もありますし、そういうエリアができれば、外国から見たらすごく誇りにできる場所になるのではないかと期待しています。

芦　原　ディテール等々、いろいろな仕掛け等がおありだと思いますので期待しております。ぜひすばらしいタワーをつくって、次の時代の僕たちの新しい東京の顔ができますことをお祈りしたいと思います。どうも今日はありがとうございました。

(終わり)

記念シンポジウム

「環境に生きる建築・美術・工芸」

開催日：2009年2月4日（水）
会　場：東京ガス　浜松町本社ビル
主　催：（社）日本建築美術工芸協会

パネリスト

岩井　光男氏	（株）三菱地所設計	代表取締役副社長
大野　　勝氏	（株）佐藤総合計画	取締役専務執行役員
岡本　慶一氏	（株）日建設計	代表取締役社長
岡本　　賢氏	（株）久米設計	代表取締役会長
佐野　吉彦氏	（株）安井建築設計事務所	代表取締役社長
六鹿　正治氏	（株）日本設計	代表取締役社長

コーディネーター

馬場　璋造氏	建築評論家	（株）建築情報システム研究所代表

司　会　ただいまより社団法人日本建築美術工芸協会20周年シンポジウム、環境に生きる建築・美術・工芸をテーマに開催いたします。では最初に当aaca日本建築美術工芸協会会長、中島昌信より皆様にごあいさつを申し上げます。
会長、お願いいたします。

中　島　いま紹介にあずかりました会長の中島でございます。本日は20周年記念事業を開催いたしましたら、多数の方にご参列をいただきまして、ありがとうございます。司会者の言葉とちょっと重複いたしますけれども、東京ガス様に会場をご提供いただいたことを、まず感謝申し上げます。と申しますのも、実はちょうど25年前、呉服橋にありました東京ガスの本社ビルを当地、浜松町に移すというプロジェクトを私は担当しておりましたので、今日は感無量でここへ参ったわけでございます。

今日、皆さんは浜松町の駅から跨線橋を通ってここへ直接お入りになったと思いますが、その時はここは陸の孤島でございまして、この地に到着するのには迂回しないと来られなかった場所でございます。このプロジェクトはその跨線橋をどうやって作るか、しかもＪＲが動いたまま、これだけのものを作らなければいけないということで、かなり当時は話題性のあったプロジェクトだったと私は記憶しております。そんなことでありまして、ここの会場でこれだけの催しものができるということは、まさに25年前を考えますと感無量でございます。

それから馬場コーディネーターとお話し申し上げましたら、今日のテーマはそれぞれのパネリストの方々にご自由にご発言願うということになっております。
実はこの20周年記念事業を決めたのは去年の、まだ北京五輪もやっておりませんし、日本の経済もまだまだという感のある時期でした。

おそらく皆さんも、設計事務所の方々というのは国の内外を問わず、情報産業の最先端で仕事をやっておられる方の集まりなのです。

したがいましてその当時と、３カ月ぐらい前からの大変な世の中の変わり方で、国内外の事情が全く急変したと思います。したがいまして馬場先生の設定の、テーマなしに自由にやろうということは、当を得て妙だと思っております。

ですから今日は皆さん、ぜひご静聴を願いまして、これから先をどういうふうに我々は見通さなければいけないか、もろもろの問題を含んでいると思います。私があまり長くしゃべりますとまずいですから、これでやめさせていただきますけれども、ぜひご静聴なさって、最後までよろしくお

願いいたします。今日はご参集、ありがとうございました。（拍手）

馬　場　馬場でございます。本日はよろしくお願いいたします。まず日本建築美術工芸協会の20周年誠におめでとうございます。本当に20年間、こうしたことが続いてきたということは大変な実績ではないかと思っております。ただ考えてみますと、我々は戦後、建築を習ってきたわけですけれども、日本の戦後の建築、これはヨーロッパ、アメリカも同じですけれども、建築は装飾を捨てて建築だけでやるということで教わってきました。それはなぜかと言うと、王宮とか神殿を作るだけではなくて、もっと大勢の人の住むところ、あるいは工場そうしたものを作るためには装飾というのは足手まといになる、それによってより良いものができなくなるという一つの理屈があったわけで、そうしたことで建築から美術とか工芸とか、装飾的なものがみんななくなっていってしまったわけです。それと一方、同時に、絵画というのも建築から離れて額縁に入って、彫刻は台座に乗って、それぞれ美術館の中に収められるようになりました。こうしてその後、だんだんたって来ると、どうも建築の中に何もないのはおかしいのではないかということをみんなが感じている。

これはむしろ建築とか美術とか工芸をやっている方以上に、それを使う人たちのほうが感じていると思うのですが、それを実際に担当する方々としては、どうしたらいいかという理論構築ができていない。

今でもまだ、でき切っていないのが現実ではないかと思います。

ただ、そうしたものが必要とされていることは、まちがいないことではないか。

そうしたことをこれから本当にどうしていくかということが、今までの20年間の経験もございますけれども、新しい形で、これから新しい環境の中で、特にこういう厳しい状態になって、真っ先に美術が切られるというようなことではないような状況をどう作っていけばいいか。一度離縁したものを復縁させるのは、なかなか難しいことです。

だけどそうではなくて、新しい関係をどう築いていったらいいかということを、今日の各パネラーが今までなさったお仕事、あるいは実績を元にお話をお伺いして、それを元にディスカッションをしていきたいと思います。また途中で、できればパネラーに対してご質問があればお受けする機会も作りたいと思いますので、お話を聞きながら考えておいていただければと存じます。よろしくお願いいたします。それでは並んだ順なのですが、まず三菱地所設計の岩井さんからお話をお願いします。お1人10分ずつということです。よろしくお願いいたします。

丸の内中通り全景

岩　井　三菱地所設計の岩井でございます。一応、あいうえお順でトップバッターということで、私は10年来、東京丸の内の開発の仕事をやっていますので、丸の内をテーマにして今日の環境に生きる建築・美術・工芸といった面をお話ししたいと思っています。

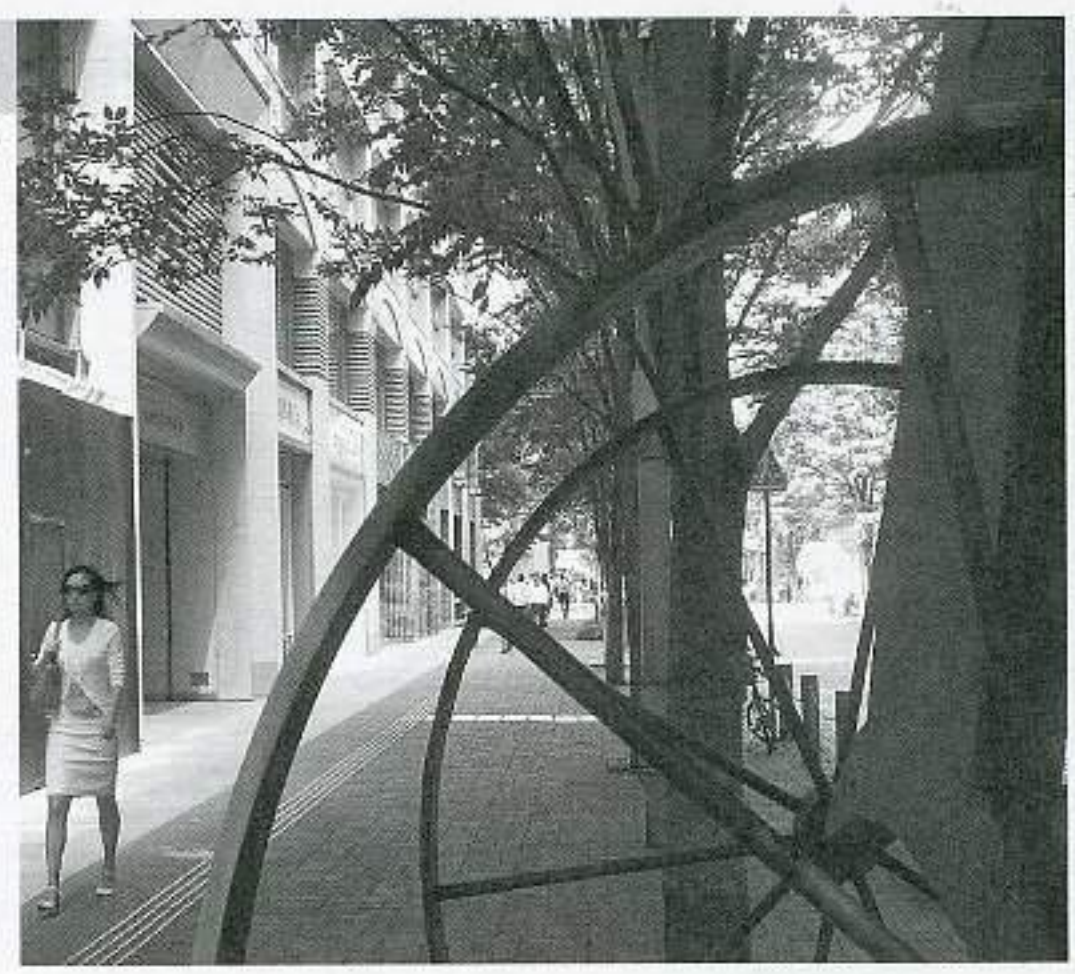
まず昭和30年ごろの丸の内というのを皆さん、頭の中に入れていただきたいと思います。これは戦後10年たって、日本の経済成長はこれからだんだん拡大していくという時期でございます。

ご覧のように手前が八重洲です。それで東京駅がありまして丸の内があって、向こうに皇居が見えるということで、この写真を見ても、丸の内というのは大変大きな区画で、大きなビルが建っているということだと思います。私は従来から建築を作る場合には、その場所の持つポテンシャルと言いますか、いいところを大きく伸ばしていく、そして土地開発の付加価値を上げるというようなことを考えながらやってきております。この写真を見ますと、丸の内が持っているポテンシャルというのは大変大きなものであるというふうに感じます。

これは現在の丸の内の写真でございます。丸ビル、新丸ビルが高層化されて、丸の内の開発が進んでいるわけですけれども、この写真をご覧になって分かりますように、丸の内のいいところと申しますのは、西側に皇居が大きな緑を抱えて、東京駅という日本でも最高のインフラがここにあって、こういったインフラと歴史的な景観に包まれた大変恵まれた場所であるというふうに感じております。

その歴史的な環境ですけれども、皇居とか東京駅とか代表するものはありますけれども、今から115年前に三菱1号館が建ってから、ビジネス街区としてビジネスに特化された開発がされてきたわけですけれども、この街の中にはやはりその時代、その時代の代表的な建物が残っています。大変少なくはなっておりますけれどもまだまだ残っているということで、日本工業倶楽部とか明治生命とか第一生命といった歴史的な建物が残っていることは、一つの丸の内のブランドを形成しているというふうに感じております。

もう一つ、丸の内の特徴というのは、こういう100メーター角のグリッドの本当に正形の土地で街が構成されているという中で、ここにはＪＲも含めた８路線の鉄道インフラが縦横に走っております。これが丸の内が経済の



丸の内中通り

中心になる一つの大きな要素です。それと地下鉄のコンコースと東京駅の地下広場とかそういうものをビルの地下のネットワークとつなげて、地下のネットワークというのも大変優れています。

例えば大手町から銀座を通って築地のほうまで地下道を通って行けます。雨の日には大変、便利なネットワークであると感じております。

丸の内は大変、機能的な業務に特化された街として進んできたわけですけれども、今から10年ぐらい前に日本経済新聞で、丸の内のたそがれというように揶揄されたこともありまして、丸の内が少し沈みかけた時代もございます。それはやはりなんと言っても、機能的なものに特化されてしまったというところに原因があるのではないかと思っています。

現在、丸の内ではここで紹介されていますように、ビルの建て替えがなされたものこれから計画されるものが二十いくつかございますが、現在この丸の内のビルの建て替えに当たって言われているコンセプトが、ここにありますABLE CITYです。Amenity、Business、Life、Environmentといったものを開発に考えて建て替えていこうというようなコンセプトで今、進んでおります。

ただ私はこれプラス、21世紀は環境の時代であると皆さん思っていらっしゃると思いますが、丸の内の持っているポテンシャルというのは先ほどご紹介した皇居の緑、日比谷公園の緑です。そういったものとグリーンのネットワーク、丸の内の開発でもっと環境のネットワークを強くしていったらどうかということを今考えております。特に丸の内の南北に中心に走っております仲通りは、現在もビルが建て替わるごとにその領域を広げておりますけれども、そこでは緑とかアートとかそういったネットワークの中心になるような設定をしながら作り上げております。この緑のネットワークは皇居の緑といったものと丸の内の街区、並木とかそういったもの、それから開発することによってできた緑地、例えば国際フォーラムの中庭の緑地とか、既存の三菱銀行の前の緑化とか、今工事をやっております三菱1号館の中庭にできる緑化とか、そういったものをつなげながら緑のネットワークを構成していこうという考え方であります。

それだけではなく、今日はaacaということでアートのことにちょっと触れたいと思います。現在丸の内は、北はサンケイビルの広場から仲通りを経由してペニンシュラの日比谷通りの入り口まで数々のパブリックアートが設置されています。それと丸ビルをやった時に立体空間にアートを設置しようということも、建築と同時に協働しながらやっていまして、丸ビルには七つから八つほどのアートがあります。

そして既存の国際フォーラムにも中庭に彫刻等がかなりありまして大手町、丸の内、有楽町のアートは全部で40近くなるのではないかと私は思っています。それが丸の内の仲通りを中心にして、アートのネットワークを展開しているというような形になっております。

こういった緑のネットワーク、アートのネットワークを重ね合わせて街作りが行われていまして、これは街歩きマップですけれども、現在仲通りを中心に数々のショップとかレストランがありまして、緑とかアートといったものと呼応しながら、大変にぎわいのある空間が丸の内に出現しているということでございます。

人が集まるということで各種イベントも定着しておりまして、ゴールデンウィークには音楽祭があって、夏には写真にありますように江戸天下祭といったようなもの、それから東京都で指定されているヘブンアーティストといったような数々のイベントがされています。

この街は就業人口としては24万人程度の人が働いているのですが、来街者としてはこの街で働く人ばかりでなくて、イベントとか街を楽しみに来る人も数が増えてきたということで、丸の内が今にぎわっております。

10年前までは機能的な丸の内の軸でございましたけれども、今は環境と文化の軸に変わってきております。これからの丸の内の開発というのは、この仲通りの環境・文化軸といったものを中心にしてやっていくということが、持続的な街作りの一つの基本ではないかというふうに私は思っています。以上です。

馬　場　どうもありがとうございました。今の岩井さん

のお話は、いわゆるアートと言ってもハードなアートとソフトなアートの両方がある。それに緑というものを加えて、建築、アート、緑、そうしたものが、昔のモニュメントではなくて、むしろネットワークとして環境を作っていこうということのお話だったと思います。ありがとうございました。続けて佐藤総合計画の大野さん、お願いいたします。

大　野　佐藤総合計画の大野でございます。今日はテーマが与えられていたのですが、先ほどの馬場先生のお話のように、各内容についてはパネラーで調整していないのです。そういう意味で装飾とかアートからは若干外れるかもしれませんが、お許しいただきたいと思います。

この写真では右のほうが北で左が南になるわけですが、点線の部分が東京の丸の内の仲通りでございます。

私は今日のテーマに対しまして、最近、大きな話題になっている地球環境問題と建築のあり方ということに対して、モダンバナキュラーいう言葉を付けました。そういう言葉を手掛かりにお話しさせていただければと思っております。

地球環境というのはご存じのように、化石燃料の枯渇化とか地球温暖化が今、顕在化しています。地球の悲鳴とか、あるいは近代文明に対する警告とも言えるのではないかと思っております。建築というのは、特にモダン建築は自然と対峙してきました。そういう対峙してきたモダン建築の再構築化というのが、求められているのではないかというふうに考えているわけでございます。

環境に優しい建築に対して、今気になるキーワードとして二つ、挙げているのですが、コンパクト化とバナキュラーという言葉です。特にバナキュラーにつきましては、ご存じだと思いますけれども、地域固有の気候とか風土に適応した建築というふうになるわけですけれども、そういう意味を含めて私はモダンバナキュラーという言葉を付けました。これは私の勝手な造語なのですけれども、モダンという言葉とバナキュラーという言葉をいわゆる対立概念として扱うのではなくて、両義的、あるいは今風に言えばハイブリッドということになるかもしれませんけれども、そういうふうにとらえていくということが重要ではないかという意味で付けたわけでございます。

風土に根差したバナキュラー建築の自然環境への空間操作というのは、いわゆる時代とか場所を越えてモダン建築の参照になるのではないかという意味でございます。ただ、バナキュラー建築をそのまま直接、引用するというのでは意味がないと思いますので、その精神あるいは考え方をいかにモダンの中に取り入れていくかということが重要になるのではないかというふうに考えるわけでございます。

最近特にヨーロッパ系の建築家は、実はこのバナキュラーという言葉に対して非常に敏感になっていまして、その中で発祥の地と言っていいのかもしれませんけれども、東南アジアとかあるいは日本に対して非常に興味を持っているわけでございます。

それはやはり自然と対峙してきた、あるいは大規模化してきた産業革命以降のヨーロッパ文化に対する反省も含めて、そういうことを考えているのではないかというふうにも感じているわけでもございます。

バナキュラー空間の知恵と申しまして、実は非常に古くから建築の原型として出てまいりまして、スライドにありますように紀元前の3000年ぐらい前からメソポタミアの都市に発生してきているような状況、あるいは京の町屋もそうかもしれませんし、後でお話ししたいのですが、中国の四合院を始めとして各種の空間があります。近代建築の祖と言われているコルビジェも計画案としてはこういうこともずいぶん提案しておりまして、一つの例としてこのような集合住宅を計画していますけれども、そこにボイド空間あるいは中庭を積極的に提案して、これを非常に空間化しているということも例として見えます。

さらには最近、非常にこういう提案が多くなってきているわけですけれども、いわゆる中庭空間をインテリア化するとアトリウム、いわゆるインターガーデンという形に展開してきたり、あるいは空中庭園を立体化した提案というのも、日本を含めて今、世界的な傾向になっております。右がコメルツバンク、これがモダン建築の空中庭園を取った最初の例かもしれません。そういうものも出てきております。

もう一つは中間領域、すなわちバッファゾーンというのも、バナキュラー建築から引用できるのではないかというふうに考えたわけでございます。日本の伝統的な家屋でも、蔀戸（しとみど）があって廊下があって障子というのは、考えによっては今、はやりのダブルスキンという形にも展開している一つの原型ではないかというふうにも思って、例を出しておきました。

当社の実例としまして、中国のプロジェクトを数多くやっております。ほかの会でも発表したことがあるのですが、この９年ぐらいで15ぐらいのプロジェクトを考えておりまして、その３分の２がいわゆるコンペとして当選しておりまして、さらにその３分の２ぐらいは実施、ないしは実施に向けて今、準備中でございます。その中で今、申しましたモダンバナキュラーという言葉を通して、中国における環境建築をご紹介させていただきたいと思います。

まず１番目が６年ぐらいたつのですが、成都三国志で有名な都ですが、ここで市庁舎のコンペがありまして応募したのですが、これは残念ながら落選しています。この時は緑を取り込んだダブルスキンとか、積極的に低層部にライトコートを取ったり、そういう空間を提案しま

した。中国においてはちょっと時期早計な提案だったかなというふうにも考えております。

次に太源の市庁舎。これは山西省にありましてちょっと内陸なのですが、良質な石炭が採れるので有名な都市です。

これは当選していまして、今基本設計まで行っています。これはスライドにあるとおり、巨大な緑のバンクを取りまして、高層棟の下を中庭空間にしております。そういう意味で光と風が十分に入るような、非常に自然に優しい空間を提案しております。

次に広州の科学城です。サイエンスシティと言ったほうがいいのかもしれません。

これはいわゆる中国人で海外、特にアメリカの大学を出ている科学系の研究者に自国、中国に帰ってもらいたいために、宿舎をほぼ無償に近い形で提供していくというのを国のプロジェクトとして考えていまして、そのプログラム自体がおもしろいのですが、それに提案をしまして、これも当選しています。

現在建設中なのですが、これも広州というのは南のほうにあるということも含めまして、非常にサスティナブルな提案をしまして、かつこのスライドにあるように、外壁のルーバーとか緑を積極的に取り込んだとか、そういうことをやっております。

最後になりますけれども、これは深圳という香港の横にある都市です。このスポーツセンターは去年、提案して、当選して着工したばかりです。これも亜熱帯にある場所性を考えて、トロピカル・サスティナビリティというコンセプトの下に、自然の光なり風が建物の中を抜けていくような空間作りをしています。その中心の空間として大きな中庭空間を取りまして、それを最も象徴的に工夫しているわけでございます。

そういうことで、中国においても昨年、胡錦濤主席が環境に対して重視していきたいということで、国を挙げてアピールをしています。中国というのはアメリカと並んで京都議定書を批准していない国でありますけれども、今後環境にかなりシフトしてくるのではないかというふうに考えております。

そういう意味で日本に対して環境技術、すなわち機械力というだけではなくて、トータルな建築デザインを含めて期待感が強いのではないかというふうに感じまして、またかつこの数年、そういうことを意図して提案して、我々も当選を得ているという状況でございます。

馬　場　大野さん、どうもありがとうございました。やはりこれからは環境建築である。それとデザインも、モダンとバナキュラーがうまい形で昇華していくような形のものであるという、大変興味深いお話をお伺いできたと思います。建築、美術、工芸とどういう関係にこれからあったらいいかを考えておいていただいて、後でまたお話を聞きたいと思います。続きまして日建設計の岡本さんにお願いいたします。

岡　本　日建設計の岡本慶一でございます。環境に生きるという大変にふわっとしたテーマで馬場先生からお話をいただいたものですから、私どももそういった意味で私が直接かかわらせていただいたプロジェクトを中心に環境に生きる建築というどちらかというと美術、工芸とはちょっと離れたかもしれませんけれども、よろしくお願いします。

これは皆さん、ご存じかと思いますけれども、ノーベル賞を受賞されたアル・ゴア元副大統領の『不都合な真実』の中の表でございます。時間軸でいきますと60万年前から炭酸ガスの濃度、二酸化炭素濃度というのが、だいたい180～280ppm程度で周期的に変化してきたけれども、産業革命以降、徐々に上昇し続けて現在、380ppmぐらいまで急激に上がってきているということで、この結果平均気温が2℃ぐらい上がってくるわけです。1.5℃を超えると生態系に影響があるという深刻な影響、気候変動クライシスというふうに言われている所以だと思います。

持続可能性ということなのですけれども、数値で表す有名な方法にエコロジカルフットプリントという考え方がございます。人間の活動を支えるために必要な地球の面積というふうに考えると、現在の人口で人間活動をしていく上で必要とする地球の面積は、なんと2.3個分の地球が必要なほどの状況になっているという絵でございます。将来的にはそれを1個分に抑えていかなければいけないということです。

これから私が携わったプロジェクトについてのお話をしますけれども、その前に環境問題の視点ということで、時代背景を少しおさらいをしておきたいのですが、実は1963年、今から45年前にバックミンスター・フラーが宇宙船地球号という話を出してまいりました。

これは『宇宙船地球号操縦マニュアル』という本なのですが、彼は既に45年前にこういったことをある意味では予見しておりまして、今後は宇宙的な視点から、石油とか鉱物資源に限りがあって、例えば太陽エネルギーなどの地球外部からの資源を活用する経済や社会システムに変革しないといけないことを、既に半世紀前から示唆をしていました。それが一番左にある年表でございます。

1969年に人類はアポロで月面に到着いたしまして、地球は青かったというのはガガーリンですが、この時、初めて実際にその映像が地球に届いたという意味で、まさにバックミンスター・フラーが指摘していた宇宙船地球号の世界、外部から地球を見たという点で、大変衝撃的な写真が出たと思います。ご存じのように1970年代には2度のオイルショックがございまして、化石エネルギーの多消費時代ということになるかと思います。その後、1992年にリオデジャネイロで地球環境サミットというのが開かれまして、これ以降地球環境時代というふうに呼

ぶことができるのではないでしょうか。また地球環境時代というのは今までの省エネ時代とはちょっと違いまして、オイルショックというのは問題の本質がオイルが高くなったおかげで経済問題でしたけれども、地球環境問題という、人類を含む生命の存続に関する大変に深刻な問題であるという認識を持った時代でございます。

2008年に洞爺湖サミット、それ以降は一般に我々が低炭素社会というような呼び方でこれからの時代を生きていかなければいけない。そういう年表でございます。

この年表に照らして、実は私がかかわらせていただいたプロジェクト、まず伊藤忠の本社ビルでございますけれども、これが1980年の竣工ですから、当時、プロジェクトを進めていたのは、ちょうどオイルショックの直後からでございます。これはアトリウム、光を利用した昼光利用であるとか、自然換気の経路を確保したり、北側のガラスを複層化するなど、そういった意味では当時の省エネ建築という時代にできあがった建物と言えるのではないでしょうか。

次が1990年に竣工いたしました日本電気の本社ビル、ＮＥＣスーパータワーでございます。これはちょうどオフィスビルのＯＡ化が進んでいた時代で、最先端のインテリジェントビルとして計画されたわけですけれども、このプロジェクトあたりからキーワードとして環境という言葉を多用しておりまして、建築の外部の都市環境まで含めた環境をテーマにした超高層ビルという時代だと思います。

これはご存じのように途中に風抜き穴を設けまして、ビルの風公害をなくすといったデザインを採用しておりますし、そういった意味では当時もＮＥＣのほうから、シンボライズするような本社ビルをぜひお願いしたいというお話がありました。

これは低層部のアトリウムの部分ですけれども、これが引き分けになっておりまして、この部分を完全に外部化する。また下のほうに開口があって、そこから風を抜きまして、夜間に冷やすこともできるというようなアトリウムです。

これがＮＥＣ本社ビルの窓回りですけれども、当時、超高層ビルとしては初めてエアフローウィンドウというのを提案しております。これは一番、環境負荷の大きな窓回りをペリメーターレスにしようという試みで、もちろんダブルグレージングで、内側のガラスを開けて清掃することもできるし、中の熱気を窓台の下から空気を取って、窓の上に排気をするということで、結局外部負荷を窓際で処理する。当時はまだ冬場でも、かなり奥行きの深いオフィスの内側では冷房をしていたという時代ですから、完全に外部の負荷を減らすことによって、冷房した空気をまた温めるみたいなミキシングロスをなくすという新しい試みだったかと思います。

これは品川にできましたパナソニックのマルチメディアセンターで、これがちょうどリオデジャネイロの地球環境サミットが開催された1992年に竣工しています。これはスーパータワーの２年後に竣工した建物ですけれども、このころになりますとコンピューターによる高度な環境シミュレーションというのが活用できる時代になってまいりました。

これはアトリウムの内部空間ですが、この建物のテーマというのが人と自然と技術の調和と融合ということでしたので、そういった意味では新しい形のアトリウムを提案し、自然を感じられるようなアトリウムであるし、窓際に行きますとこれは完全にガラスがありません。そういった解析技術をうまく駆使することによって、アトリウムの空気と執務空間の空気が全く一体になる、スクリーンのないアトリウムというものを提案したものです。さらにナイトパージと呼ばれていますけれども、夜間の自然換気で冷気を床下のスラブに蓄熱させるという方法によって、画期的な省エネ対策を可能とした建物でございます。

次はセントレア中部国際空港を紹介したいのですが、これは2004年に竣工しておりまして、この10年間で環境技術というのはデザインボキャブラリーとしても完全に消化しきれるような時代に入ってまいりました。ここでは空調システムについても大空間用の空調システムですとか、人が少ないオフの時間には人をカウントしまして、混雑度センサーで外気の取り入れ量を制御するというようなことで、一歩進んだ省エネを実現できた事例でございます。

これは当時、トヨタから来られた平野さんという社長が、今、日本の空港というのは全部、降り立った時に日本に着いたのかどうか分からない、とにかく和のデザインで行こうというお話がありましたので、私どもとしては折り紙を折ったような一切、曲線を使わない建築ということで、折り鶴みたいなものをデザインテーマとして設計したわけです。

こういう内部空間ですけれども、光の取り入れ方とか、そういったところでも当時、オブ・アロプと共同でやっておりまして、彼らと上部構造の構造デザインなども一緒にやったのですが、オブ・アロプはファサードエンジニアリングという分野で、特にオーストラリアを拠点にして活動しておりましたので、うちの環境技術とオブ・アロプのファサードエンジニアリングの技術を融合させまして、トップライトの大きさであるとか、どういうパネルを取り付けたらいいかとか、直射光はどういう時間に入ってくる可能性があるかとかをかなりシミュレーションしたものです。ここに行灯がありますけれども、これが空調と照明と放送と案内情報をインテグレートしたメカニカルランタンと呼ばれる行灯でございます。これは最後ですけれども、2005年に竣工いたしましたＮＥＣの玉川ルネッサンスシティでございます。

この時代はもう既に低炭素社会、地球環境時代をどう

いうふうに建物で表現していくかということで、かなり突っ込んだCO^2削減の手法を取り入れております。廃棄物も一切なくそうではないかということを考慮して、実は工事の発注時に見積要項書の中にあらゆる項目を入れておきまして、実際に現場に入ってからリサイクル率100%を目指すような運動として、現場の方とも一緒に取り組んだ事例でございます。

徹底した環境活動を行い、これは地球環境大賞というものを受賞いたしました。これは広場でございます。ある意味ではクライアントの企業の姿勢であるとか理念を情報発信するというのも建築の大事な役割だと考えまして、あらゆる外構についても環境との調和ということを目指して設計したものです。

最後になりますけれども、最近の手法でCASBEEというものがございますが、これはいろいろと計算をしてみますと、CASBEEのＳクラスになる建物かと思います。低炭素社会を実現する上で、まさに地球１個分の暮らしをするために、削減目標というのは当然、各国でいろいろありますけれども、確か安倍首相がクールアース50という目標を2007年に掲げました。これでいくと国全体として70%削減しなければいけないということで、セクター別でいきますと業務用ビル、民生用のほうでは40%の削減が目標になるわけです。

この玉川ルネッサンスシティでは38%のCO^2の削減を実現したということで、そういった意味でこの建物程度の建物を今後、作り続けないと2050年にCO^2を現在の50%に削減するということは難しいのではないか。その一つの物差しになる建物ではないかというふうに考えています。これが地球の絵でございまして、そういった意味で今後、こういった姿勢で建築に取り組まなければいけないのかなということを感じております。以上です。

馬　場　岡本さん、どうもありがとうございました。大変広い視野から、また長い視野から見て、化石エネルギー時代から省エネルギー時代、地球環境時代から低炭素時代、それに対応してどういう形で作っていくかということがよく分かっていただけたと思います。岡本さんにも大野さんと同じで、後でそれと美術、工芸とどういう関係がこれから考えられるかということも一言、お話しいただければと思います。

グローバルな話をしたところで、ゴア元副大統領の話があったのですが、私は計算したことがあって、今地球に60億として、全員で分けると地球の地表が１人、約２万5000平米もらえるのです。日本は１人、3000平米なのです。そういうのをどう考えていくかということはいろいろあると思いますけれども、大きなものをちゃんと見ながら実際のものを見ていくということは必要なことではないかと思っております。どうもありがとうございました。それでは続きまして久米設計の岡本さんにお願いいたします。

岡　本　久米設計の岡本賢でございます。またまた岡本ですが、大変、残念ながらお隣の岡本さんとは姻戚関係はございません。環境に生きる建築・美術・工芸ということで、ずいぶん幅広いテーマになっているのですけれども、私たちはだいぶ以前から、建築というものは建築から環境へというような考え方が必要ではないかという基本的なテーマを掲げまして、日々の業務に取り組んできているわけです。

これは私たちの久米設計の創立者の久米権九郎という男なのですが、その久米権九郎が、我々は建築の中に住んでいるわけですので良質で健康的な生活が送れるような住まいの中にいなければいけない、これはまさしく良質で健康的な環境を作ることだというようなことを掲げまして、建築に取り組んできたというようなことがまず基本的にあるわけです。

我々が精神的に安定して上質な市民社会を構成するには、やはり健全な環境の中にいなければいけないというようなことで、建築から環境へというテーマを掲げてきております。もちろん、今で言いますようなCO^2問題とか、省エネ環境ですとか、そういうものもあるわけですけれども、そういうものを含めて人間生活全体の良質な環境ということが必要ではないかという基本的な考え方を持っているわけでございます。

もともと我々人間は自然の中に暮らしていましたので、以前から建築と自然とは一体的なものであったというふうに考えておりますが、その建築が周密してきて都市という形態を作っていく中で、さまざまなエネルギーを必要とし、自然エネルギーだけではないエネルギーに頼って環境を構成していくというような時代になってきて、今の都市空間というものができてきているということがあるのではないかと思います。

それにしてもそういう都市の環境というものは、もともとは人間が生活を始めた環境に近いものであるということがまず第一に必要なのではないか。我々が自然の中で生活していた時には、自然と建築と都市は連続していたというように考えられるのではないかと思いますが、その連続してきた空間が、文明を駆使して膨大なエネルギーを消費して都市生活を実現しようとしてきた時から、今のような自然から離れた、人々にバーチャルな自然空間を提供するというようなことの装置になってきているのではないかというふうに思います。

現在の我々は都市に暮らしておりますので、都市空間そのものが自然空間のようなものと考えられております。そういう中で環境ということをテーマに考えますと、そういうエネルギー的な問題も含めて、地球環境全体も含めて、いかに健康な生活ができるような場を作っていくか。これが建築だけではなくて造形芸術全般、美術、工

芸一体となってそういう生活の場を提供していくということが、我々に求められているのではないかというように思います。自然の生態系の延長線上であるようなエコロジー空間、過度のストレスが起きないような自由な場を作るということが、我々の建築に対する取り組み方に必要なものではないかというふうに考えています。

そうは言っても現実的にはいろいろな制約の中で我々は現実のプロジェクトを展開しておりますので、特に東京という大都市の中で社会性以前に経済性の問題がありますし、それらを解決しながら少しでもそういう理念に近づけて取り組んでいきたいというようなことで、そういう中から最近、完成したプロジェクトの中で、二つほどご紹介させていただきたいと思います。

最初のは昨年オープンしました赤坂サカスです。これは東京の赤坂にあるわけですけれども、東京の都市空間というのはもともと非常に丘陵地、起伏に富んだ地形の中にありまして、この赤坂も坂にある古い歴史を持った文脈のある街ですので、そういった赤坂の歴史と街の文脈を継承することとか、この場所が放送会社の場所でありますので、そういうメディアと人々の生活の場としてどう組み立てるかとか、都市の多様性とか変化を都市環境の中にどう作るかというようなことが大きなテーマになってきたわけです。

そういう中で私たちの提案としましては起伏に富んだ都市の表情をいかに生かして、その中でいかに多様な場所性を作っていくかということで、ここは斜面緑地にかなり豊富な緑がありましたので、その緑を最大に生かして桜の森を作ろうというようなことですとか、坂道の広場を作ろうというようなことを組み合わせて、魅力的な都市空間を作っていく。都市の記憶を残しながら変化に富んだシークエンスを作っていくということと、桜の丘を中心にして既存の非常に濃密な商店街、赤坂の街がありますので、そういう中に自然を作り出して、都市の広い空を感じられるようなオープンスペースを作っていこうというような都市環境を提案したものでございます。

これは完成した姿です。いくつかの都市の情景を見ていただければと思います。非常に緑豊かで、広い空を感じられるような都市が、この中にできあがったのではないかと思っております。

二つ目は霞が関のコモンゲートという、一昨年、竣工しました都市環境でございます。霞が関はかつて江戸の城内にありまして、そういった非常に歴史的な記憶の濃厚な場所があります。

そういう記憶をどう継承するかということと、首都にふさわしい、東京を代表する都市景観の場所ですので、そういう景観をどう作るか、非常に広大な広場、緑の大地をどう作るかということをテーマにして、この都市空間を魅力的にしようと考えました。

中央に霞が関ビルと一体となった大空間、これを新たな緑の場として作っていこうということを基本にしまして、それぞれのオフィスが展開するという構成に作っております。先ほどの江戸城の外堀の石垣が一部、残っている場所で、左下にありますように外堀が以前はこのような形で入っておりまして、そこの石垣等がこの場所にあります。そういったものの場所性の記憶の継承ということがこの場所においてはかなり大きなテーマになるのではないかということで、それと一体となった都市広場を構成して、都市に格調の高い環境を作っていこうというふうに考えたものでございます。

工部大学校がかつてこの場所にありましたし、霞山会館とか霞会館とか、そういう古い建築の場所であった時代がありました。その中で記憶を継承しながら新たな首都を代表する景観にしたいというふうに考えました。緑の大地をどう構成するかというようなテーマで空間環境建築をどう作るかということの、さまざまなシミュレーションです。

こういうことで、東京の中に今まで私どもとしましては数々のアーバンスポットを作ってまいりました。恵比寿ガーデンプレイスとか文京グリーンコートとか錦糸町オリナスとか、それぞれ魅力的なアーバンスポットを作り、ほかにも六本木ヒルズですとか東京ミッドタウンですとか、大変、魅力的なアーバンスポットがあります。

それらと連携して都市の中の都市がさまざまに競争し合って、全体として魅力的な都市の環境を作っていくということがこれから必要な、私たちに与えられた使命ではないかというふうに考えております。以上でございます。

馬　場　岡本さん、どうもありがとうございました。環境を作るというのが一番初めの久米さんの時代から考えられていたというのを、現代にどんどん発展していったということと、岡本さんの話の中でちらっと頭をよぎったのですけれども、今我々は自然と人工物を分けるけれども、逆に言えば人工物も広い意味では自然の一部ではないか。これは自然のなせる技を、ただ人間が孫悟空がお釈迦様の手の上でやっているようなことをやっているんだと考えることもできそうだとちらりと頭をよぎりました。

今日は建築、設計以外の美術関係の方、工芸関係の方もいらっしゃると思いますので、それとの関係をどうするかというのを後でもう一度、皆さんにちょっとずつお伺いしたので、考えておいていただければと思います。それでは次に安井設計事務所の佐野さんお願いいたします。

佐　野　佐野でございます。1枚目が抜けているのですが、Yes, we can.というロゴが最初に出てくるのです。そこに映っていると思いながら聞いてほしいのですが、真ん中に私の写真が載っております。私というのは、建築を作るとこれが人々の心を動かして、

人々の行動を促すことができると素朴に信じている、こういう不遜な人間です。皆さんもおそらく建築の設計とは、そうした素朴な確信がないと始まらないのではないかということで、私の絵がここに載っております。

その右にジョットの絵があります。それはアッシジの聖フランチェスコという聖人の絵で、鳥に説教しているのです。これは聖フランチェスコというのが鳥にも分かるほどの分かりやすい言葉でお話をしたということなので、写真では鳥に一人ごとを言っているようにも見えるのですが本当は優しい言葉で語ったというのではなくて、自分の意図を伝えるには非常に骨が折れるという教訓を伝えているかのような絵なのです。それがあることを想像してください。

もう一つ、オバマの写真が載っております。これはYes, we can. あるいはいろいろな分かりやすい言葉で人を動かすことに成功した政治家でもあるわけですけれども、実際にはかなりしたたかな準備を重ねて就任演説を行っています。いずれにしてもそれぞれの分野で人の心を動かすには大変苦労、苦心があるということで、今日の建築家というのはどのようなアクションを取るべきか、どのようなアクションが本当に人の心に響くかについて考えてみたいという前置きでございます。

今、映っておりますのは谷口さんの設計のＭｏＭＡのカフェなのですが、大変居心地がよさそうでございます。これはそれぞれの人たちがそれぞれのライフスタイルを楽しんでいるように見えております。このように建築がニューヨークの眺めと生活になじんでしまうと、建築はわき役になってしまっています。

そうするとここにいる人たちは空間の意図というものに関心を持たなくなるかもしれないということなのですが、これは残念なことだろうかということです。空間とか建築というのがその都市や都市景観全体のクオリティを高めるために機能していることが結果として表れれば、それは建築家として残念と思わずに、わき役としての十分な役割を果たしていることに満足をしなければいけないと思います。建築は基本的にはわき役なのだろうと思います。

でも、そんなことで遠慮していては仕事が始まりませんので、建築家の考えることをきちんと伝えなければということで心配になりまして、私がというよりも、これはJIAの千代田会の企画した模型展でございますけれども、我々の事務所の１階にございますロゴバというインテリアショップを使いまして、千代田区内の設計事務所が集まって共同で模型展をやっております。

こうして、建築家というのはこういうことを考えているのだというメッセージを必死に伝えようとしているわけでございます。我々の作品は一番左の明るい超高層の模型でございますが、こうしたアクションの併用というのをうまく効果的に使うことによって、いろいろな意味での建築家と社会との結び付きが始まるということではないかと思います。

次はいきなりご存じの顔が並んでいると思いますけれども、プサンで行われました昨年秋のアルカシア、アジア建築家評議会でのワンショットでございます。ここには韓国の建築業界の会長でありますとか、アメリカのAIAの会長とか、UIAの会長とか、いろいろな顔が見えます。にこにこと笑っておりますけれども、こうして協調しながら社会にメッセージを伝えようとしているわけでございます。

プロフェッションとか建築教育とか、こういったことについての国際的な整合性を図る議論をして、プロの責任について、社会貢献について、さまざまなメッセージを発信しているわけでございますが、いろいろと丁々発止もございます。ただこうやって、これからは建築家が国と国との境を越えて、いろいろな意味で共通のメッセージを発信していかなければいけないというのが、一つの建築家と社会との関係作りの大事な仕事でございます。

2011年にはUIA大会を東京で行いますけれども、これは昨年、2008年のトリノ大会でのスナップであります。もっと身近なレベルで、建築家という存在があることをまず伝えなければいけないという試みがトリノで行われていました。カザルスホールが閉められるとか、そごうが大丸に店舗を譲ると言っても、ちっとも建築家がだれであるかというのが新聞に載らないというのは非常に忸怩たるものがございますけれども、イタリアのような建築家に対する理解のある風土でさえ、ここにメッセージが書いてありますが、一番上に書いてある「都市は建築家が作った」というキャッチコピーを作って、街行く人にこの建築はだれが作ったのか、どういう建築なのかということを解き明かすという試みを行っております。こうやって少しずつ情報をきちんと提供しないといけない。これは東京にあっても、日常的に試みられてもいい試みではないかと思います。

同時に次の世代に対しても積極的に直接、働き掛けなければいけないということも大事だと思っております。これは大阪市立の花乃井中学というところに私が出前講師に行った時の写真でございまして、パワーポイントで建築の作られ方とかを見せているわけです。映っておりませんけれども図面とかスタディ模型とかを見せまして、どうやって建築が作られるかということを、素朴に驚かせて手順を見せるということをやっております。

ちなみに最後に、いつでも事務所に遊びにおいでと声を掛けたら、嬉しいことに女子中学生がたくさん事務所に来てくれましてCADの作業を少し体験してもらいました。

彼女たちはきっと建築の道に進んでくれることを確信しますけれども、少なくともいい建築主にはなってくれるのではないか。こういった作業も大事かと思います。

そういう建築を支える基盤を作ることというのは、非

常に大事なことだと思うのです。短期的に建築家の存在を知ってもらうことも大事なのですけれども、長期的基盤を作るという意味では、これはウェブサイトからとったページですが、シカゴのアーキテクチャー・ファウンデーションが作成したかなりいろいろなところで紹介されていますけれども、子どものための建築テキストです。これは正確に申しますと建築を通じて数学や美術の基礎教育をするプログラムのテキストなのですが、こういった取り組みにかかわって充実させるということは、最終的には我々自身が仕事をする上でも、大変に意義がある試みではないかと思います。これはぜひいろいろな意味で日本でも広がることを期待するものでございます。

ガラッと様子が変わった写真が出てまいりましたが、これは水路でございます。いろいろと具体的に説明するよりも、建築あるいは土木でも何でもいいですが、構築物の形というのがおそらく一番リアルにいろいろなメッセージを伝えるのではないかと思います。これはご存じの方もあるかと思いますが、北杜市という小海線の甲斐小泉という駅の近く、小渕沢から清里寄りのところですが、ここに三分一湧水（さんぶいちゆうすい）という湧水の分水場というのがございます。
これは湧水を下流にある三つの村の方向に均等に分けるという、大変優れものの分水場でして、中央に石が置いてありますけれども、これで三つの方向に水が均等に流れるという大変よくできたもので、改修はされていますけれども江戸時代にまずできたものでございます。

これは何に感動したかと言いますと、これができて三つの村のいさかいがなくなったということでございます。それまでは水の取り合いをしていたということで、社会の平穏というものが実にシンプルでシンボリックないいデザインで実現されているという、これ以上のメッセージはないだろうということでご紹介いたしております。

こうした成果を見ると、結局あまり余計なことをせずにデザインするのがよいのではないかという気にもなってまいります。事実、我々の設計によります兵庫県の播磨町というところにあります保育園なのですが、今ユーザーがいっぱい写っております。

ここでのユーザーというのは小難しい説明を聞かなくても、話しても分からないと思うのですが、建築や樹木のことを、どろんこになりながら体で記憶するであろうと思います。私自身もそういう意味では、通った幼稚園の時間というのは今でもなんとなく幸せに回想することができるように、その中に建築がふっと入っているというのが、あまり自慢話をするわけではありませんが、そういうのがいいデザインなのだろうと思います。

これは初台のカトリック教会なのですが、神父さんがたくさん正面に立っているのは仲間の修道士を追悼しているのですが、教会というビルディングタイプというのはロマネスクあたりから基本的にあまり変わっておりません。こういう形をしているのですが、こうやって信者たちが共同体として集まって祈るということが不可欠なのです。そういう使われ方をするので、これは多分、結婚式場のチャペルとはぜんぜん本質的に違うものであろうと思います。

これは建て替えたわけですけれども、建て替えられる前の聖堂のイメージの継承とか、舟越桂さんのお父さんの舟越保武さんによる受難の図というのが別の場所から持って来られてここに飾られているとか、つまりいろいろな長い時代を経た活動の継続する中に、建築があるということなのではないかと思います。

これは浜松のフラワーパークという仕事なのですが、これもやはり長い歴史を持つパークの中で、エントランスのビルを作り変えたという仕事でございました。こういう時代になりましたので、これからまだまだ活動を続けるという意志が発注者側にないと、開始が実現しなかったであろうプロジェクトでございました。

つまり建築家が何を申し立てようと、何を作ろうと、その建築の存在意義を正しく説明するのは、建築を通じて行われるであろう人々の活動そのものであろうということなので、そういう意味ではわき役には違いないのですけれども、じょうずに演じることのできるわき役でなければいけないだろうと思います。活動実態のない建築というのは、残念ながらいかなる美辞麗句をもってしても人の心に伝わらないということだと私は思っております。

ということで、あまり大胆な結論ではないのですけれども、結論代わりに第1回東京マラソンの写真を出しております。私は今年も3回連続で出場するのですが、これは走り終えた後、41キロ地点まで戻って撮りに行ったところです。マラソンというのは何がすばらしいかというと、都市を体によって理解する、体によって読み解く、時間をかけて読み解く重要な作業だというふうに私は考えて走っているのです。……人が汗をかいて実現させて、それを人がみんなで体を通してじっくりと経験しているということに、非常に都市のすばらしさがある。ここに根差した成果がつまり道路であり、いろいろな構築物を作った効果がここに実現している風景を見ることができるというようなことでございます。ということで、建築と社会のかかわり方についての私の考え方を説明申し上げました。ありがとうございました。

馬　場　どうもありがとうございました。今のお話の中心はメッセージですね。どうメッセージをするか。ただこれはメッセージを出すだけでなくて、受け取る側の問題もあるわけです。それからさっき、チャペルがありました。あれがロマネスクのころから変わっていないと言うのですけれども、実は藤森さんが去年の暮れに出した『建築史的モンダイ』という新書版があるのですけれども、その中で、ああいうバシリカ型の教会というのは決してもともとではないし、今も多くはないのだというのを実

証して書いているのがあるので、皆さん、ご興味があったら、大変ユニークで、しかもふざけているようだけれども本当にまじめな本なので、それを今、思い出しました。どうもありがとうございました。それでは最後になりましたけれども、日本設計の六鹿さんからお話をお願いしたいと思います。

六　鹿　日本設計の六鹿でございます。6人の一番しんがりということでお話をさせていただきます。馬場さんからいただいたテーマが環境に生きる建築・美術・工芸ということで、環境に生きるということはいろいろな意味があるだろうということで、環境に寄り添うとか、環境を生かす、環境に共生するあるいは環境をある形で増幅していくとか、または新しく環境を創造するということまで含めて、多分、環境に生きるという言葉になるであろうというふうに考えます。

ここでは今、申し上げたいくつかの環境に生きるという様式を、建築と環境との関係で示しております。環境という言葉も既に5人の方がお話しになりましたように非常に幅があります。

環境、自然環境、環境デザイン的なものから、地球環境サスティナビリティということまで、さまざま幅があるだろう。それから場合によってはフィジカルな環境だけではなくて、ノン・フィジカルな文化的な環境とか、そういったものが多分環境的なものとして論じられる可能性があるということだと思います。

まずここにあるのはフィジカルな環境と建築の関係ということで、左の真ん中にあるやつですが、これは第1回のAACA賞を受賞した多摩動物公園昆虫生態園という建物です。これは多摩の丘陵の傾斜地に、その傾斜の形をある種、うまく受け取りながら、その傾斜の感じを増幅させて見せる。しかもそれ自体が蝶々の形になっているという建物でございます。

真ん中の上は皆様、ご承知でしょうけれども、アクロス福岡でございます。これは新しい自然環境を都市に新たに作っていくというタイプの建築です。これもAACA賞を初期のころに受賞しております。

これは大規模な屋上緑化の先駆けということで、既に話された地球環境建築の先駆的事例だというふうに考えています。今、十数年を経ておりますけれども、この写真以上にそこに行ったら自然の山があるような感じでございます。ところがあの建物の向こう側に行くと、普通の大きな街路にガラス張りのオフィスのファサードがあるという、大変不思議な建築であります。

その左は太陽が過酷な環境の中で太陽を避ける、そして避けた上で太陽を利用するというような建築であります。これは沖縄の糸満市庁舎で、エコビルド大賞とか新エネ大賞とかさまざまな賞を受けておりますけれども、建築本体全体をルーバーで覆う。そのルーバーを太陽電池パネルで作るということで、太陽から守りながら、あわせて太陽を生かすという建築であります。

右の上はAo（アオ）というふうに通称しておりますけれども、青山通り沿いの、今、竣工して下側の紀ノ国屋がオープンしておりますけれども、まだ上の部分はテナント工事中であります。これは青山通りに建っておりますが、敷地の北側が低層の住宅地ということで、そちらの環境を守らなければいけないということで、それに面してステップガーデン状の緑があります。あわせてタワーですけれども、下がくびれる形の高層ビルになっています。これは何かと言いますと、デザイン的におもしろいということもあるのですが非常に厳密に言うと、日影をうまく減らしていこうとすると、頂部を削るよりも根元をちょっと削ったほうが全体の日影が減るのです。それにもかかわらずボリュームをしっかりと取りたいということで、こういう形になっております。

それから真ん中の写真ですけれども、これは割と最近建った建物ですが、環境に沿いながら環境を新たに創造していく建築ということで、日産先進技術開発センターという建物です。これは起伏のある丘陵地にもう一つの丘を作る。その作られた丘の内側にステップバック型の新しいワークプレイスを創造するといった建築であります。

その下の水辺にある都市計画的な模型でありますけれども、これは都市的スケールで環境を生かして増幅するという目的で作られた中国の山東省の都市計画で、昨年、コンペで当選したものです。水辺で運河を作って水の循環が行われる。そして風力発電、あるいは太陽光発電の畑が作られていくという壮大な計画です。現在、これの実現に向けて少しずつ、いろいろな計画が部分的に立てられているというところです。

右下ですけれども、これは日本橋三井タワーです。

これも一昨年、AACA賞をいただいた建物でありますけれども、これは環境に生きると言っても人文環境としての歴史的建造物を生かす建築ということです。ここで注目されるのは、そういった人文環境としての歴史的建造物を保存するということと、この土地を経済的に利用するということがなかなか従来、一致してこなくてしばしば非常にいい歴史的建造物が壊されてきたわけでありますけれども、この保存を経済的にも可能にするという目的で、重要文化財特別型特定街区という新しい制度を、建築家の側からクライアントと一緒になって役所に働き掛けて作ったものです。そしてその重要文化財特別型特定街区の適用第1号ということで、この保存が可能になり、なおかつそこのところの床面積が新しい建物に付与されたという建物です。これも一つの形の環境に生きる建築と考えます。

左の下ですけれども、足元の写真がありますが、これは現在進行中でプロジェクト名を明かせない建物なので

すけれども、豊かな都市環境を足元回りにさまざまなものを使いながら作り込んでいくということが大変大事になると考えています。そういう場所にこそ今日の本来のテーマでありますところの環境と建築と美術と工芸、そういったもののコラボレーションとか融合が求められるのではないかというふうに考えます。

ここからは特に環境と建築と美術との融合というaaca的視点から、先進的事例としての新宿アイランドのプロジェクトについてお話をしたいと思います。これは竣工から10年以上たっていますけれども、いまだに管理状態が大変、良好で、新しさをキープしております。これは西新宿の西のほうから見た遠景でありますけれども、こういった都市的環境、あるいは人工的環境の中ではより豊かな環境を新たに創造するということ、つまり環境の創造ということが課題になると思います。

同じように見えるいくつもの超高層ビルでありますけれども、それぞれ事業的枠組みが違うわけです。事業的枠組みが違うと、用途とかデザインの違いに反映していきます。

西新宿の中心部は淀橋浄水場の跡地でしたので１敷地１事業主というのが典型でありまして、おおむねそのバリエーションでできているわけでありますけれども、そこから外れた回りのエリアはいわゆる多数の地権者がいて、そういう人たちの組合による市街地再開発事業というのが大変多いわけであります。

この写真の右下に小さな空撮がありますけれども、この新宿アイランドは典型的な市街地再開発事業です。多数で多様な地権者による協議会ないしは組合がこの再開発を進めていきました。したがってその結果、地権者の中には法人もいれば非常に零細な地権者もいるということで、それぞれが要求してくる用途規模がばらばらなのです。そういったものをデザイン的に一つの複合体に統合するということが課題なわけです。

建物の外観とか外部の公共空間のデザイン的統合といったものが、非常に大きなテーマになるということが言えるかと思います。そこには非常に強いデザインの意志が必要かと考えております。ここでは環境ということで高低差、あるいは空間の囲い込み、あるいは舗装のパターン、樹木を入れるところ入れないところ、水・アート・照明・サイン、そういったものを融合させ、組み合わせながら、この空間を作っていったわけであります。

そしてここのデザインの大きな考え方ですけれども、普通の建物の敷地としては極めて不規則なピストル型と言いますか、三角形をえぐったみたいな形ですけれども、こういった形をしています。これは再開発に入る入らないという、いろいろなせめぎ合いの中で、入らない人も出てきたから途中のエリアが抜けていくとか、そういったことがあって最終的にこういう形で再開発ができあがるということになるわけです。

これは建物の規模とか用途がみんな違うわけですけれども、これをどういうふうに統合するかということでした。三角形の極が主なアプローチなのです。下が新宿の駅、左が都庁、右が西新宿の駅です。その極にエネルギがわーっとわき上がって来て、そこに円運動が起こるということで三つの円を三極に作る。その円から広がる波紋があって、波紋が重なるところ、つまり真ん中に最大のボリュームができあがるという形で全体の形を統合していったわけです。

環境作りの要素としては、各棟のファサードがあります。それから舗装のパターン、水・緑・サイン・照明、そしてアートが重要になります。ということで、アート計画、パブリックアートですけれども、これに大変、力を入れたプロジェクトです。全体のアート計画の考え方ですけれども、四つの方針を立てました。

置物としてのアートを置いても、これはおもしろくない。アートと建築の関係が密接な抜き差しならぬ関係になっているようなことが必要だというのが第１です。

その次にこれだけ大きなエリアですから、一つのアートを置いたらおしまいというわけではなくて、あちらこちらにそれに適した場所があるわけです。複数のアートになる。そうすると、複数のアートを貫く統一的なコンセプトが欲しい。これが第２です。

三つ目は、こういうところにアートがあってもそのアートはおのずから美術館に置かれるアートとはかなり性格が違うであろう。美術館に置かれるアートであれば、それは例えば人間のいろいろな感情とかを非常にダイレクトに表すものでもかまわないわけです。例えば怒りとか悲しみとか、そういったものも美術館に置かれるアートであれば、それは人間の思索を深めるものであるのでいいと思うのですが、やはりパブリックな場所に置かれるものは何気なくみんなが通り過ぎて、そこにある心理的なサブリミナルな影響を受けるわけですから、それは快適でポジティブなものでなければいけないだろうということで、快適でポジティブということを三つ目の方針にしました。

四つ目はどうせやるなら世界中のさまざまな、国際展で活躍している著名な作家とやると、コラボレーションの上でも大変、勉強になるのではないかということで、四つ目は著名作家ということにいたしました。

建物のタワーの外装がグレーのグラデーションということで、大地から生まれて天に至るというのがテーマでしたので、アート計画のコンセプトも星の輝く天と愛に満ちた大地というふうにいたしました。配置の方針としては三つの極にカラフルな作品、それ以外のところは白を基調にモノクロの作品を置くというふうに考えたわけです。やはりアートを空間に置くというのは、人の動きのきっかけを作るという点もあります。例えば大きなボリュームがそこに来るわけです。

ここのプロジェクトには大きなサンクンガーデンがあって、これが正面のアプローチから非常に目立つところにあったわけですけれども、そこに、ここに入り口があるよというものを置きたいということで、ゲート性を象徴する2本の柱を作ってくれということで、ジュリオ・パオリーニという人に2本の円柱を建ててくれと頼みました。

アートというのは見る人によって意味の重層性と言いますか、その人の経験とか知識とかによって空間がいろいろな意味に見えてくるわけです。そういうよさがあるわけですけれども、このパオリーニはちょっとひねったのです。一つの柱、左側は柱脚が下にありまして、右側は柱脚を上にしてさかさまにしているのです。それでセットになっています。それをステンレス鏡面仕上げの上に置いているのです。そうするとその鏡面をのぞき込むと空が見えるし、柱がさかさまに地面に向かって、実はそちらが空に見えるような、すなわち天と地が同義性というか、天も地も同じですよとか、あるいはつながっていますよというような、一種のだまし絵的作品なのです。そこまで見る人にとってはそういうおもしろさが出るし、ただゲートで、ここが入り口だと思って見る人にはそれだけということで、空間に意味の重層性を与えるというおもしろさがあります。

これがおもしろかったので、最大の建物のロビーの真ん中のスペースを彼に与えたら、この二つの柱をうまく引っ張って、それをセットにしたような作品を真ん中に持って来ました。ちょっと見にくいですけれども、右側の絵の真ん中の白いところを、ぐるっと柱が取り巻いているのです。

それがあたかも下を見たら下が天のように、下向きに伸びているように見えるのです。これもだまし絵です。僕たちの床のパターンがあたかもそれを誘導したかのようなある種のご縁を感じましたので、あまりにおもしろいので、もう一つ、彼に場所を与えたのです。

それは外の広場のサンクンガーデンの真ん中です。真ん中に丸いスペースを開けておきまして、ここに何かデザインしてくれとお願いしました。広場は置物を置くような場所ではなくて、むしろ人の活動、人間が主役でありますので、そこに立体の彫刻を置くよりは平面の作品を埋め込んだほうがおもしろいだろうということで考えたわけですけれども、そこで彼が提案してきたのが太陽の周りの惑星とか流星の軌道、そこに左手と右手が重なっている。左手には腕時計がある。右手には鉛筆が持たれている。鉛筆の先と腕時計の秒針が重なっている。そんな作品でした。

ここで私たちは、それは多分、時間と空間と人の技といったものを表現しているのだろうと考えたわけです。非常に雄大で知的な提案だというふうに考えました。ある意味で宇宙と人間の存在の根源を象徴しているというふうに考えたわけです。そこでもう一つ、彼に機会を与えました。これは時間の流れの中で、順番なのです。オベリスクの時計のデザインも彼に頼みました。

これはカラフルな部分の一つの例ですけれども、ビュランという人の作品です。

建物にストライプを付けて別の秩序を表現する人ですけれども、円形建物の中心からストライプを持って来る。それから敷地の一番、長い辺にそれを交差させる。交差したところに立柱が建つというような作品です。

次は水辺に白い彫刻。敷地のメイン道路沿いの長い歩行車軸に水面がありますけれども、そこに長沢英俊というミラノで活躍する彫刻家の『Pleiades（すばる座）』という作品、手前がファブロの『PASSI』という作品です。それぞれ白い大理石を使って、建物の、地かから生まれて天に至るというコンセプトをそれぞれに解釈しながら作られた作品です。建物がグラデーションでありまして、下のほうは非常に濃いグレーなので、そういうところをバックにして白の作品が非常に引き立つということです。

ずっとアートの話をしてきましたけれども、夜景の作り方というのも都市の環境の創造の重要なポイントだというふうに考えています。

先ほど申し上げた広場の中心に白い大理石がありますけれども、そこに投光いたしますと、投光された光だけで広場全体がポワッと明るくなるということもお分かりになるかと思います。円形のデザインを強調するような照明をやっています。こういう照明のデザインも建築の全体のコンセプトと非常に絡んでおりますので、建築家の側でしっかりとデザインのコンセプトを打ち出して、それを照明コンサルタントとコラボレーションしながら、どういう器具を使えば効果が出てくるかというようなことを考えていくものだというふうに考えております。

最後ですが、これはロバート・インディアナの『LOVE』という作品です。

これは、この開発全体の表札であり、象徴でありますけれども、今や西新宿の象徴的アートであって、観光名所にもなっております。『LOVE』というのはここでは再開発のすべてを集約していると私たちは考えています。再開発事業というのはさっき申し上げたように非常に大勢のオーナーがいるわけですが、それぞれの人たちのベクトルが大変に違うわけです。そういうベクトルを一つに統合していくというような意味で、『LOVE』というのはその統合の象徴として大変、ふさわしいものなのでないかというふうに私どもは考えました。毎日、人々が通るところでありますので、人々の心にサブリミナルにこの『LOVE』というのが効いてくるのかなというふうに期待しています。こうやって建築と美術のコラボレーションを通じて都心の環境を作る、あるいは環境に生きる建築・美術・工芸というのをお話しいたしました。以上です。

馬　場　六鹿さん、どうもありがとうございました。一番、まじめに、まともに環境に生きる建築・美術・工芸を考えていただいてありがとうございました。時間が30分もオーバーしてしまっているのですが、やはり今日、来ておられる方は建築の設計の方だけではなくて、美術とか工芸の方もおられると思いますし、今日のテーマの実際の環境の中での建築と美術と工芸のあり方が、これからどうあったらいいかというあたりを一言ずつ、どういうふうにお考えになっているか、今、六鹿さんはその辺のお話もしていただいたのですが、お話をお伺いしていきたいと思います。では岩井さんからお願いいたします。

岩　井　先ほどの私の話で、丸の内でいわゆるネットワークという話があったと思うのですが、これからの我々建築設計者というのは個々の自分のエリアだけのことを考えているといいものはできないし、今回のこういう経済的なクライシスの中でやはり失敗している人たちというのは一辺倒に何かをやっている。経済的にはアメリカに頼っているわけですけれども、自動車産業とか、そういうのがだめになるとその下請けがだめになってしまう。

都市というのは非常に多様性を含んでいて、多様性ということがおもしろさを都市に与えているわけであって、モノを作る時にそこら辺の都市のおもしろさというものをうまく組み合わせていく。それは今、ネット社会と言われていますけれども、こういう社会の中で、うまくアートなり環境なりをつなげていくということが、我々の職能として一番、大事なことではないかと今、思っています。

例えば住宅地の価格下落が今、言われていますけれども、よく調べてみますと、例えば田園調布とか麹町とか、昔からの住宅地というのは値下がりしないのです。これはなぜかというと、行ってみると分かるように、ちゃんとした並木があったり、建築協定で生け垣にするとか、全体として景観を守っているのです。

ですから一つの土地だけで塀を作って中に緑をやるということでは、これは環境としてぜんぜん評価されないのです。お互いに住む人たちが連携を取りながらやるということが、非常に価値あることなのです。

都市についてもまさにそうなのです。先ほどパブリックアートもネットワークと言いましたけれども、これも1カ所スポットだけで考えているよりも、都市全体としてそういうネットワークを構成することによって、アートの多様性というものをそこに住む人たち、働く人たちが体感できるということがありますので、私はこれからの街作り、建築という中ではもっと広域的な中から我々はデザインのソースを取り出して、それと協調していくようなものが必要ではないかというふうに思っています。

馬　場　どうもありがとうございました。最後にもう一言、建築家としてどういうアーティスト、あるいはクラフトデザインの人というのを求めますか。

岩　井　私は丸ビルをやる時に感じたのは、丸の内というのはそれまで業務に特化された機能的な町でした。これはある時期になると、あそこはつまらない街だというような評価、生活しにくいという評価になってくるのですけれども、丸ビルをやるにあたって、それをなくそうということでアートを導入したわけです。その時に選定の基準となったのは時代をつかむと言いますか、環境のことをよく考えているアーティスト、それから人々のインタラクティブな交流とか、そういうものを考えているアーティスト。やはり先ほどのお話にもあったように、どこかのスペースにぽこっと置くアーティストではなくて、もっと環境を考えた美術、アートを考えている人たちと、我々としては一緒にコラボレートしたいということがありました。

馬　場　なるほどよく分かりました。それとさっき言われていた緑等も含めて、そういうものとどういう形で関係を持つかということまで考えるのが必要だということですね。どうもありがとうございました。それでは続きまして同じテーマなのですが、大野さん、お願いいたします。

大　野　今までのお話にありましたように、本来、歴史的に見ますと建築と美術、工芸というのは、ある意味で分離するというよりはむしろ一体的だというふうに理解していいのではないかと思うのです。特に彫刻と建築の関係、あるいはアートと建築の関係を見ると明らかではないかと思います。それが究極的な形になると、きっと装飾という問題にもなるのかなというふうに感じているのですが、そういうものが分離されてきたというのは、モダン建築とか、あるいは時代的にもこの100年ぐらいだと思うのです。

そういうことを考えてみると、美術館とかホールというのもこの100年、200年ぐらいの世界であって、昔はそういう分離もなくて一体的なものであるというふうに感じているわけです。私が先ほど話したバナキュラー建築というのもそうなのですが、そういうものがモダン建築、あるいは美術との関係において有効ならば、今言ったそういう関係性というのは改めて見いだす必要があるかというふうに思います。

そういう意味で一時、はやったポストモダンみたいな時代には当然、戻れないと思うのですが、建築とアート、あるいは美術との関係というのは、私が個人的に思うのは、いわゆる緊張感を持った関係であるべきではないか

と思うのです。

すなわちそれぞれが主張はするけれども、その主張の中で調和するということ、あるいは一体化するということが必要ではないかと思うのです。美術のための建築、あるいは建築のための美術というような従属的な関係というのは、どうなのかなというふうに思います。

そういう意味で、緊張感のある関係の中でそれが結果的に一体となるような、そういう建築と美術の関係が生まれるといいなというふうに思っております。

馬　場　何々のためというのではなくて、本当にそれが両方一緒になって緊張感を保つことの必要さというのを感じるということですね。ありがとうございました。岡本さん、いかがでしょうか。これは一番言いにくいかもしれないのですが、アートと同時に工芸という問題を建築でどう取り上げればいいかというようなことがもしあれば一緒にお話ししていただければと思います。

岡本慶一　今まさに100年に一度の危機と言われている時代に我々は突入しているわけで、だれにとっても未体験ゾーンに入ったというような認識を持っているのですが、これからどういう時代になるのかというあたりが私には大変、興味があります。確かに回りを見て経済成長なり、GNPが対前年比でずっと伸びてきたような、こういう時代が今回のクライシスで皆さん、ある意味では認識を改めなければいけないし、ひょっとしたら産業革命以来の大変革の時代に入ってくるのではないか。そういう意味で、トンネルを抜けた先の景色みたいなものがどういう景色になっているかというのが一番、興味のあるところでございます。確かに大きな景気の変動があるのだから、今回も多少、大きな波が過ぎれば、またみんな同じようにどこの企業も収益を回復して、トヨタ自動車も今後も車が売れ続けるような時代になると思われている方もおられるかもしれないけれども、今回はそういった意味ではエポックメイキングなことであり、パラダイムシフトが明らかに起こる。

ではどういう時代になるかという時に、私は建築であり美術であり工芸であり、そういったものの力みたいなものが、ある意味では非常に重要な時代になってくる。21世紀は環境の世紀とも言いますし、心の世紀とも言われているわけで、中にはクリントンさんのスマートパワーの時代であるというような話もありますし、それ以前にはソフトパワーという話もありましたけれども、ある意味で建築も含めたそういったナレッジと言いますか、堺屋太一さん流に言えば明らかに地下社会に突入した節目の年に昨年から今年はなったのではないか。

そういう意味でこれからの日本の進路というか、どういう生き方をしていくかという時に、あまりにも日本の伝統的な技能であるとか工芸であるとか、美術も含めまして日本のナレッジというか知というものが、おろそかにされ過ぎてきたのではないか。そういったものは建築と一体となってもう一回、復活しなければいけないし、それがある意味で世界に誇れる日本の建築であり、日本のアート、日本の工芸になるのではないか。そういう節目に差し掛かっているのかなという、感想で申し訳ないのですが。

馬　場　お考えは大変よく分かりました。そのうちにまた波が変わるというよりも、お先真っ暗とも違って、雪の中でどちらか分からなくなるのをホワイトアウトと言いますが、まさに今、そういう状況なのかもしれないです。その中でどう見ていくかというのは、経済的な価値基準から文化的な価値基準に、基準の支柱がシフトいかなくてはいけないというようなことが今のお話の中で伺えるかと思います。どうもありがとうございました。

岡本賢　いろいろな環境変化、時代変化があるにしましても、いずれにしましても私たちを取り巻きます生活空間というものが常に続いています。それがその時代の変化に合わせていろいろに変容しているということはあるのですが、生活空間を構成する要素というのは、建築であり、さまざまな美術、工芸に値するものが連続して、空間の質を決めているのではないかというふうに思うわけです。

例えばこの空間を例にとってみて、壁の材料は何を使うか、壁にどういうデザインが施されるか、天井にどういうパターンが作られるか、それによってこの空間の質は全く変わってくるというようなことがありますし、それが上質な空間になるか、あまりおもしろくない空間になるかというのは、そこにさまざまな芸術家なり、クラフターなり、建築家なりがかかわって、そういう空間を構成していくわけです。ですからお金をかければいいものができるというようなものを超越したようなところで、必ずそういうものが必要になってくるのではないか。

要するにここにあります建築・美術・工芸というのがそれぞれ独立したものではなくて、それが総体として建築空間を作っていくものというようなとらえ方が必要なのでないかと思いますし、日本は結構、伝統的に生活芸術的な、生活に必要なものを芸術に育てるというようなところが非常に強い、世界の中での特殊性があるのではないかと思います。そういう生活空間を我々は常に生きているわけですから、さらにこれからも生活空間を変えるし、作るし、そういう視点で総体として、要するに建築・美術・工芸というふうに分かれるものではなくて、総体として空間を作るものの要素として、こういうものをとらえていくことになるのではないかというふうに考えているところです。

馬　場　ありがとうございました。確かに作っていくのは、オフィスの場も含めて生活する空間です。その中で、それに対応していく建築の心構えというのは今の皆さんの考えで環境との関係がよく分かったのですが、例えばアーティストとかクラフトというのが、ただ生活に対応すると言われてもどうしていいかなかなか分からない。さっき言ったように美術館の額縁に収まり、台座に乗ったもの、クラフトもいわゆる商品化してしまったもの、それをどういう形で生活と結びつけるかという心構えみたいなものは何かありますでしょうか。

岡本賢　それはやはりその空間をどういう空間に作り上げるかという、そこにかかわる建築家なり、造形作家なり、いろいろな方がかかわると思いますけれども、それと同時にもちろんそこを使う方の意志というのが最初にあると思いますが、それをコラボレートする中で、どういう空間に仕立てるためには、どういうものが必要なのかということが自然と語られていって、それぞれの作家の中で、そういうもののイメージが立ち上がっていくという関係になってくるのではないかと思います。

馬　場　もっとコミュニケーション、これも建築家とだけでなくて、それを使う人とのコミュニケーションがもっと必要で、さっきメッセージと言われたのは佐野さんですが、そういうものがもっと今までとは違った意味で、ただ自分はこうやっているというのではなくて、コラボレートした中でのメッセージみたいなものが必要だということですね。どうもありがとうございました。佐野さん、いかがでしょうか。

佐　野　建築美術工芸協会というのは団体として非常に楽しいというか、参加しがいのある会だと思っているのですが、それは今のお話と逆の意味で、建築と美術と工芸というのはぜんぜん違う職能で、おそらく考えていることの出発点はだいぶ違うはずなのです。

だけど人間同士、個別に付き合ってみると非常に気持ちが通じ合ったり、この人と付き合うと自分が刺激を受けるとか、一緒に仕事をしたいとかという関係があって、コラボレーションみたいなことが始まらなければいけないというふうに思います。

調和を目指すというのが我々、建築家の職能ではあるのですが、本当は調和せずにお互いが好き勝手なことを言いながら、刺激をし合っている形でできあがるというのが実は社会にとっては、そのほうがいいものができたというふうに思ってもらえるのではないかと思います。先ほどメッセージという話をしましたけれども、そう言いながら結局、自分が本当にやりたいこととか目指したことは、実はあまり正確に伝わっていないような気がするのです。それぞれがやっていること、アートのほうも、工芸のほうも。

でも伝わらなくてもいいのではないか。つまり半分ぐらい伝わって、あとは使う側が勝手に自由に解釈して、とんでもない解釈をしたけれども、できあがったものを気に入って、そこで都市がにぎわいをかもし出すようなことになれば、これは十分、成功だというふうに私は思うのです。そういう意味では仕事はまじめにしますけれども、結果を几帳面に求めないほうがいいのではないかという感じを持っています。

馬　場　なるほど。だからアートにしてもクラフトにしてもそうだと思いますけれども、目的ではないのですね。結果としてそれが人に受け入れられる。こうあるべきだというのではない。それに、どういう出会いがあるか分からない。そういうものを楽しみたいということになると思います。どうもありがとうございました。それでは六鹿さん、先ほどかなりお話しいただいて、特に新宿アイランドの例は大変、よく分かったのですが、現在の心境と、これからどういう形でアート、クラフトに向き合っていかれるかというあたりのお話をお伺いできればと思います。

六　鹿　基本的にはそんなに変わっていませんが、今の佐野さんの話は非常に意味があるお話だと思うのです。と言いますのは、建築に本当にアートとか工芸が必要かという問いを投げかけると分かると思うのです。非常に突き詰めていって、すべてはがしていって機能だけということになれば、必要ないという答えが出てくるのです。だけどそれでは人間の文化ではない。

そうするとあえて若干、お金がかかったり、あるいはプロセスが複雑になっても、ただ建築家が壁の材料、天井の材料、床の材料を考えるだけではなくて、そこでクラフトをやる人とかアーティストとコラボレーションしていこうというのは、やはり空間により豊かさを与える。その豊かさというのは何かというと、まさに今佐野さんが言ったように、どう解釈したっていいじゃないかというその辺のいい加減さ、あいまいさがいいのです。つまり見る人によって意味が違ってくる。それがいいのです。

すなわち単なる機能的な空間だったら、多分、意味は一つなのです。それにアートが加わり、クラフトが加わることによって、見る人の経験とか好みとか知的レベルとか、そういったものに応じてぜんぜん空間が違って見えるというか、ダブって見えるというか、いろいろな形に見えてくるのです。そこが人間の文化にとって大事なのかなという気が私はしています。それでさっきいろいろと申し上げたのです。

馬　場　必然ではなくて、偶然という要素がかなり必要だというようなことになると思います。

六　鹿　偶然もあり得るのですが、建築家というのは統

合者としての責任を果たす必要があると思うのです。統合者としての責任を果たすのだけど、一緒にコラボレーションするアーティストとかクラフトマンをがちがちに縛ってしまったらだめで、彼らのほうがすごい部分が当然ありますから、それを引き出すような、そういう意味の偶然のやり取りというのはあり得るかなと思います。

馬　場　それは偶然と必然の間に蓋然性、プロバビリティというのがあるわけです。それがよくなればなるほど、偶然であるけれども必然に近付いていく。そういう中での可能性を引き出すということだと思います。

六　鹿　非常にうまいコラボレーションができあがると、ある種のシンクロニシティみたいなものを感じてしまうのです。そこまで行ったら多分、成功です。

馬　場　実は皆さんからご質問をいただこうと言っていたのですが、だいぶ時間が過ぎてしまって申し訳ないです。ただ、今日の6人の皆様方のお話はいろいろな意味で大変、参考になったと思います。環境と建築の問題はこれから一番、大切である。それにネットワーク、あるいは緑も加わるというようなことがあると思います。

私が今の2回目のお話を聞いていて感じたのが、大野さんが緊張感がある関係が必要だと言われて、それから佐野さんが刺激が必要であるというようなことを言われたのですが、考えてみると昔は建築と美術とか工芸というのは結婚していたと思うのです。

どうも建築と美術とか工芸というのは結婚していたと思うのです。ところが離婚してしまったわけです。それをもう一度、結婚させるというのではなくて、本当はむしろ愛人関係のほうが常に緊張感があって、しかも常にフレッシュで、どうも建築と美術と工芸はそういう関係ではないかというふうに、今日の皆さんのお話をお伺いしていて感じました。

会場の皆さんはどうお考えになったか。また機会があったらそういうことを十分、考えていただければと思います。少し不謹慎な話で終わらせますけれども、それはかなりアナロジーとして考えていくと、意外にあるかなという感じはいたしております。6人のパネラーの皆さん、ありがとうございました。皆さん、長時間ご清聴ありがとうございました。それでは司会のほうにマイクを戻したいと思います。(拍手)

司　会　馬場先生、パネリストの皆様方、ありがとうございました。今一度、大きな拍手をお願いいたします。

(終わり)

記念撮影